わたしの聖書が一番！ 12巻

牢獄から救い出されて～
天国と新しい世界

～使徒行伝 12章 - 黙示録 21章～

もくじ

第1章　牢獄から救い出されて …… 1
第2章　イエス様の伝道者たち …… 8
第3章　イエス様への賛美 …… 15
第4章　伝道者になったテモテ …… 22
第5章　福音の炎 …… 29
第6章　神様に真実をつくす …… 36
第7章　別れを告げるパウロ …… 43
第8章　エルサレムでの騒動 …… 50
第9章　失われた機会 …… 58
第10章　帰って来た奴隷 …… 65
第11章　パウロの最後の日々 …… 72
第12章　待ち望んだ日 …… 80
第13章　天国と新しい世界 …… 87

第1章
牢獄から救い出されて

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。さがせ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」マタイ 7:7

日曜日

わたしたちはこれまで、人類を救うための神様のすばらしいご計画を人々に学ばせないようにと、サタンが手をつくしてきたことを学んできました。サタンは、神様の人間に対する愛を人々に知ってほしくないのです。

イエス様が天におもどりになった後、サタンは、彼自身のことを人々に信じさせる方法を考えつづけていました。どんなに傷つけようと努力したとしても、人々がイエス様を信じ、十戒に従うためにイエス様の助けを得るならば、彼らが安全で幸福でいられることをサタンは知っていました。

ステパノが死んだとき、人々はイエス様を信じる選びをやめましたか？いいえ、そうではありません。生き延びるために、多くの人たちが他の土地へ行かなければならなくなったとき、彼らはイエス様のことを伝えるのをやめたでしょうか？いいえ。

サタンの忠実な手下だったのに、とつぜんイエス様の忠実な弟子になったのは、だれでしたか？それはサウロです。神様がユダヤ人を愛するのと同じように、異邦人も愛しておられることを学んだのは、だれでしたか？それはペテロです。今では、イエス様のすばらしい福音と、神様の愛について学ぶ人は、ますます増えるばかりです。サタンは、この「良き知らせ」が広まるのを、止めることができませんでした。サタンは残酷な敵であって、イエス様を信じる選びを人々にさせないようにしていることに、多くの人たちが気づき始めていました。

***考えてみよう：** 今、サタンはどのようにして、人々にイエス様のことを学ばせないようにしていますか？それでも多くの人たちは、どのようにしてイエス様のことを学んでいますか？*

月曜日

イエス様が天にお帰りになった後も、イエス様がユダヤ人を愛するのと同

じように、異邦人をも愛しておられるということを、ペテロとほかの使徒たちはなかなか信じられませんでした。神様はどのようにして、ご自分がすべての人を愛しておられることを、ペテロにお示しになりましたか？

使徒たちの心を満たしたのと同じように、聖霊はコルネリオの家で、異邦人たちの心も満たしてくださいました。そこでペテロはついに、神様がすべての人を愛しておられることを知ります。ヨハネ 3:16。

ところが、ペテロがエルサレムにもどってみると、彼がコルネリオの家に行ったことをよく思っていない信者がいることを知りました。しかも彼らは、そのことでペテロを責めたのです。使徒 11:2,3。

そこでペテロは、神様が彼に見せてくださった、あの奇妙な幻のことを話して聞かせます。4-10 節。

それからペテロは、コルネリオが彼を招くためにつかわした、３人の男たちについて話しました。11-14 節。

さらに、ペンテコステの日、使徒たちに聖霊が下ったのと同じように、コルネリオの家にいた人たちにも聖霊が下ったことも話しました。15-17 節。

このすばらしい出来事についての話を聞いた人たちは、言葉が見つかりませんでした。ペテロと同じように、彼らも今、これまでの考え方がまちがっていたことに気づいたからです。そこで、彼らはどうしましたか？ 18 節。

考えてみよう：この時、サタンはどんな気持ちだったと思いますか？人々にイエス様のことを学ばせないようにしようと、これまで以上に固く決心したと思いますか？サタンは今でも、世界中の人たちに働きかけていますか？

火曜日

エルサレムの宗教指導者たちは、今もなお、信者たちがイエス様のことを伝えるのを止めようと必死でした。そしてそのために、冷酷なヘロデ王に助けを求めたのでした。使徒 12:1。

民の指導者たちはこの時もまだ、イエス様のことを伝えるグループのリーダーを殺すことさえできれば、人々がイエス様を信じなくなるだろうと考えていました。そこでヘロデ王は、ヨハネの兄弟ヤコブを牢獄に入れました。それから彼は、恐ろしい行動に出ました。2 節。

悲しいことに、ヤコブは、イエス様の特別で忠実な弟子の中で、最初の殉教者〔信仰のために生命をささげる人〕となりました。ほかの仲間たちがどんな気持ちだったか、想像できますか？

邪悪なヘロデ王は、祭司や民の指導者たちから好かれたいと思っていました。ヤコブを殺したことで彼らがよろこんだのを見たヘロデ王は、ペテロも殺そうと決心しました。こんどは、人々が見物できる場所で殺そうと思いました。3 節。

けれども、その時は過越しの祭りの時期で、大勢の人がエルサレムを訪れていました。これらの人々の多くは、ペテロのことも、ペテロをとおしてなされるイエス様のすばらしい奇跡のことも知っていました。ヘロデ王と祭司たちは、町に来ていた大勢の人たちが、殺されるペテロを助けようとするのではないかと恐れました。それに、ペテロが力強い説教をしたら、どうなるでしょう?そうなったら、さらに多くの人たちがイエス様を信じるようになるでしょう。そこで王は、過越しの祭りが終わるまで、ペテロを牢屋に入れておくことにしました。4節。

考えてみよう:ほかの使徒たちや信者たちは、何をしていたと思いますか?あなたが彼らといっしょにいたなら、何をしていただろうと思いますか?

水曜日

ペテロが牢獄で死を待つ間、エルサレムの信者たちは何をしていたのでしょう? 使徒 12:5。

ヘロデ王は、牢獄からペテロが絶対に逃げ出せないように、あらゆる手をうちました。4節。

これらの番兵たちは、一瞬たりとも眠ってはいけないことをよく心得ていました。ペテロが逃げ出せば、自分たちが殺されてしまうのです。ペテロとヨハネは前にいちど、牢獄から脱出したことがありましたが、彼らがどうやって出て来られたのかは、だれも知りませんでした。それで、死刑にされる前の夜、ペテロはふたりの兵士の間に鎖でつながれていました。6節。

その晩、死を待つばかりのペテロは、どんな気持ちだったと思いますか?心配のあまり、眠れなかったでしょうか?いいえ。ペテロは眠っていました。ぐっすり眠っていたため、うす暗い牢獄がとつぜん明るくなったことにも気づきませんでした。だれかがペテロにさわり、「起きなさい」と言いました。ペテロは眠そうな目を開きます。そばには、ひとりの光輝く天使が立っていました。天使は彼に、何をするように言いましたか? 7節。

ペテロは立ち上がりました。自分をつないでいた鎖は、きれいにはずれています。見張りの兵士たちは、ぴくりとも動きません。もしかしたら天使は、驚いているペテロをほほ笑んで見ていたかもしれません。ペテロは天使にしたがいましたが、まるで夢を見ているような心地でした。足にサンダルをはき、上着を着てから、天使のあとにしたがい、番兵のひとりをまたいで行きました。8,9節。

牢獄の扉まで来ると、扉はひとりでに静かに開いたので、彼らはそこを通りぬけました。すると、扉はふたりのうしろで音をたてずに閉まりました。すべての扉がこのようになりました。兵士たちは、ひとりも動きません。ペテロは、幻を見ていると思ったにちがいありません。10節。

考えてみよう：ペテロは、心からイエス様に信頼していましたか？彼は、イエス様のために死ぬ心構えがありましたか？あなたはなぜ、そう思いますか？

木曜日

その夜、天使とペテロは、牢獄の重い鉄でできた扉と門を通りぬけました。それらの扉と門は、ひとりでに開いて閉まりました。彼らがすぐそばを通っても、番兵たちは少しも動きませんでした。新鮮な冷たい空気につつまれた外に出ると、天使のまわりにあった光はとつぜん消え、天使もいなくなりました。**使徒 12:10**。

ペテロはまだ、自分は幻を見ているのだと思いました。しかしたしかに、ひんやりした夜風を体に感じます。天使はもうそこにはいません。そばには、番兵たちもいませんし、手には鎖もかけられていません。ようやくペテロは、これが幻ではなく、現実であることに気づきました。彼といっしょにいた天使は本物だったのです。神様がペテロを牢獄からつれ出し、自由にしてくださったのです。なんということでしょう！ **11 節**。

ペテロはただちに、自分がまずどこへ行くべきかを考え、そこに向かいました。そこにはどんな人たちがいて、彼らが何をしているのかも、ペテロにはわかっていました。一刻も早く、何が起こったかを彼らに知らせなくてはいけません。ペテロは、多くの信者たちが集まって祈っている家に向かい、暗い通りを足早に歩きました。**12 節**。

その家に着くと、ペテロは扉をたたきました。ところが、夜中の訪問者をむかえ入れようと、だれかが玄関のところまでやってきたのですが、扉を開けてはくれません。ペテロは、ふしぎに思ったことでしょう。この後に何が起こったのかは、明日勉強しましょう。

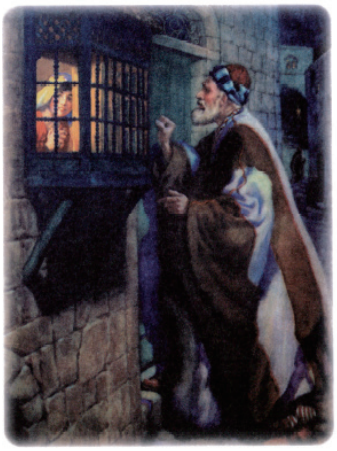
考えてみよう：あなたのそばにも、保護天使がついていますか？その天使は、いつでもずっとあなたのそばについていますか？

金曜日

その時は、まだ夜中でした。ペテロは家の外に立ち、扉をたたいています。夜が明けたら死刑になるペテロを神様が救い出してくださるよう、家の中の人たちが祈っていたのを、ペテロは知っていました。まさに神様は、彼らの祈りに答えてくださったわけです。扉をたたく音が聞こえたので、ローダという女中をつかわして、ようすをうかがわせました。ペテロの声を聞いたローダは、みんなのところへもどり、ペテロが来ていると伝えました。**使徒 12:13,14**。

興奮のあまり、ローダはペテロを中へ入れるのを忘れていました。また、ペテロが来ていることをみんなに話しても、だれも信じようとしませんでした。それでも彼女は、ペテロが来ていると言い張りました。**15 節**。

ローダは、扉をたたいているのが天使ではないことを知っていました。ペテロにまちがいありません。ようやく信者たちが扉を開けると、そこには本当に、ペテロが立っているではありませんか。これほどうれしいことがあるでしょうか！16節。



ペテロはあわてて、信者たちに、静かにするよう身ぶりで伝えました。彼らはペテロが、イエス様の起こしてくださったすばらしい奇跡の話をするのを、よろこんで聞きました。それからペテロは、より安全な場所へと去って行きました。17節（参考：17節に登場するヤコブは、ヘロデ王に殺されたヤコブとは別人です）。

さて次の朝、ペテロがヘロデ王によって死刑にされるのを見物しようと、群衆が集まって来ました。ところが、ペテロをつれてこようと兵士たちが牢獄へ行ってみると、そこにはおびえた番兵たちしかいませんでした。ペテロは、いなくなっていました。邪悪なヘロデ王は、はげしく怒りました。18,19節。

考えてみよう：ペテロは、ヘロデによって殺されることが神様のみ心だったとしても、神様を信頼したと思いますか？あなたも、ペテロが持っていたような信仰を持ちたいと思いますか？

もっと学ぼう！

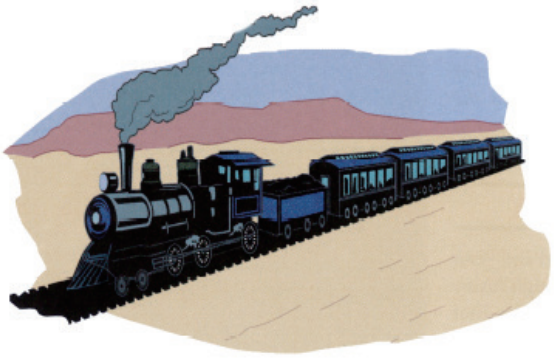
★使徒 12:1-9

★患難から栄光へ 15章 p. 154-160

汽車を救ったジョニー　その１

作者不詳 エイミー・シェラード編

ジョニー・トンプキンスは８歳で、彼の父親は汽車の車掌さんでした。そのころの汽車は、現在の電車とはだいぶちがっていました。乗客がすわる車両は、今日の乗り心地のよいものとは、ほど遠いものでした。暑い日でも、部屋の中を涼しくしてくれるエアコンはありません。たまらず乗客が窓を開けると、煙とすすが入ってきます。また寒い日には、まきや炭をストーブで燃やして、冷えた車両を温めなくてはなりませんでした。



ジョニーの家は、父親が仕事で乗る汽車が、夕方に１日の運行を終えて到着する、終着駅の近くにありました。汽車は一晩その駅にとまり、翌日、また運行を始めるのです。毎日、夕方になるとジョニーは、汽車が駅に着く時間に父親をむかえに駅へ行き、ふたりでいっしょに家へ帰りました。

イエス様のことを学び、イエス様を愛していたジョニーは、イエス様のために働きたいと思っていました。彼はそのことについて、いろいろと考えてきました。そしてある日、彼はこうたずねました。「ねぇ、お母さん、ぼくみたいな小さな子供でも、イエス様のお手伝いができるのかな?」

母親はジョニーを見つめ、にっこりと笑いました。「大人でなくても、イエス様のお手伝いはできるのよ。」そしてこう言いました。「イエス様にお願いすれば、毎日どんなお手伝いができるかを、イエス様が教えてくださるわ。ジョニー、あなたがお手伝いできることがたくさん見つかって、きっとおどろくはずよ。そうして大人になったら、あなたがよい伝道者になる準備ができて、たくさんの人たちを助けることができるようになるわ。」ジョニーは、母親にそう言われてうれしくなりました。

その日の夕方、ジョニーはいつものように、父親をむかえに駅へ行きました。父親はいつも、ジョニーと会うのを楽しみにしていました。彼はジョニーの手をとって、汽車の最後尾の車両につれて行きました。父親はまだ家に帰る準備ができていませんでした。その日は寒かったので、彼はジョニーに、車両の暖かいストーブ

の近くにすわって待つように言いました。

ジョニーが待っている間、車掌助手がミスをしました。助手は、ジョニーが乗っている最後尾の車両を、ほかのすべての車両からはずしてしまったのです。汽車がとまっている線路は平らでしたが、後ろのほうは少し下り坂になっています。前方のエンジン車両が、汽車を少しバックさせたときに、ジョニーは急な揺れを感じました。ほかの車両は全部とまりましたが、ジョニーを乗せた車両はほかの車両からはずれ、後ろのほうへ動きつづけています。少し先にはゆるやかな坂があり、車両はひとりでに坂を下り始めました。

さあ、大変です。ジョニーは、父親のいる駅からどんどん離れて行くこの大きなからっぽの車両に、ひとり取り残されてしまいました。ジョニーは怖くなりました。車両の後ろのドアに走って行き、外を見ました。すると、これまでになかったほど、ジョニーをさらにぎょっとさせる光景が目に入りました。線路のずっと先の方に、ひとつの光が見えたのです。それが、父親がいる駅へまっすぐ向かう急行列車であるのを、ジョニーは知っていました。急行列車は、ジョニーの乗った動きつづける車両と同じ線路上を走っています。いったい、ジョニーに何ができるというのでしょう?

（つづく）

第2章
イエス様の伝道者たち

暗唱聖句

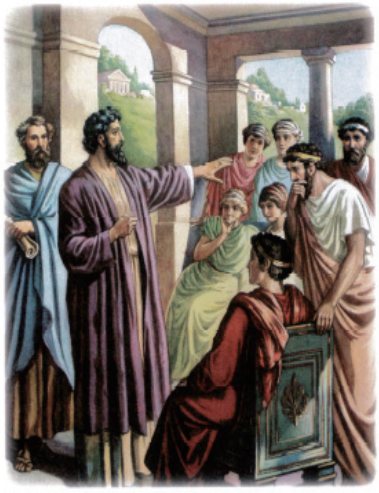
「わたしは平安をあなたがたに残して行く。…あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」

ヨハネ 14:27

日曜日

神様は、すべての人を愛しておられますか?そのとおりです。しかし、使徒たちの時代には、多くの人がこのことを信じていませんでした。その時代にあなたがいたとして、ユダヤ人でなかったとしたら、「異邦人」と呼ばれていたはずです。イエス様を信じない多くのユダヤ人は、異邦人が神の国に入ることはないと固く信じていました。しかし、イエス様にしたがう人たちは、その考えがまちがっていることを学んでいました。

当時、使徒たちが知っているほとんどすべての町や村には、ユダヤ人が住んでいました。エルサレムを去ったイエス様の信者たちは、ほかの町や村に移り住んで、それぞれの場所で伝道者となりました。彼らがイエス様のことを伝えたので、異邦人もユダヤ人も、イエス様のことを信じるようになりました。そして、これらの新しい信者たちも、行く先々でイエス様のことを宣べ伝えたのでした。



信者たちが住んでいた、大都市のひとつに、アンテオケという町がありました。まもなくアンテオケでも、多くの人たちがイエス様を信じるようになりました。使徒11:20,21。

エルサレムの指導者たちは、アンテオケに信者が大勢いることを聞いたので、バルナバを働き手としてつかわしました。22節。

神様がアンテオケの教会を祝福なさっているのを見て、バルナバはよろこびました。彼が人々に説教をすると、どうなりましたか? 23,24節。

そこで働き始めたバルナバは、少しもたたないうちに、さらなる働き手が必要であることに気がつき、その働き手にふさわしい人物もすでに考

えていました。明日の学びで、その人物について勉強しましょう。

考えてみよう：伝道者は、どんな働きをしますか？子供でも伝道者になれますか？どうすれば、伝道者になれるのでしょう？

月曜日

バルナバはアンテオケで、助け手を必要としていました。さらに多くの人がイエス様のことを知りたがっていたので、彼以外に説教したり教えたりする人が必要でした。バルナバは、その助け手に一番ふさわしい人物として、サウロのことを考えていました。

しかしそのサウロは、何十キロも離れた別の町にいるのです。バルナバは、サウロを見つけることができるでしょうか？それでも行ってみようと決心し、ついにサウロをさがし出すことができました。サウロはバルナバとアンテオケにもどり、神様はこのふたりの働きを祝福なさいました。アンテオケの人々は、イエス様にしたがう人たちのことを、何と呼ぶようになりましたか？使徒 11:25,26。

祭司たちは人々にクリスチャンになってほしくありませんでしたが、バルナバとサウロがアンテオケで 1 年働く間に、さらに多くの人がクリスチャンになりました。そしてこれらのクリスチャンは、他の人々にイエス様のことを伝えたのでした。

聖霊は、アンテオケの教会の指導者たちに、バルナバとサウロが神様の特別な働き人となることを告げていました。彼らはどのようにして、なすべき働きに任命されましたか？使徒 13:2,3。

このようにして特別な働きに任命された人たちは、心からイエス様を愛する人でなくてはなりませんでした。彼らは人々から尊敬されるよき指導者、また模範でなくてはなりません。神様が彼らに望んでおられたのは、聖書によって人々を教え、まもなくイエス様にお会いするための準備をさせることです。

考えてみよう：「クリスチャン」という言葉は、「キリスト（クライスト）」から出た言葉ではありませんか？ですから「クリスチャン」を名のる人たちは、自分たちがイエス様を心から信じていること、また自分たちは彼に従い、彼のようになりたいと望んでいるのだと言っていることになるのです。しかし、クリスチャンを名のる人たちみんなが、本当にそのような人たちでしょうか？

火曜日

バルナバとサウロは、安手礼〔重要な仕事につく時に、頭の上に手を当てて祈り、聖別する儀式〕を受けた後、伝道者として多くの場所を訪れました。使徒 13:3。

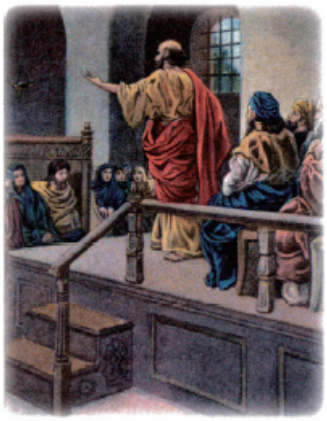
伝道者になるというのは、決して簡単なことではありませんでした。ある時は船に乗って旅をし、またある時は、ほこりだらけのさびしい道を、何十キロも歩かなくてはなりませんでした。時には空腹や、のどの渇き、疲れに耐えなくてはなりませんで

したが、不平をもらすことはありませんでした。バルナバとサウロは会堂で人々に説教し、イエス様のことを伝え、多くの人がイエス様を信じるようになりました。

ある所では、地方総督とよばれるローマの役人が、バルナバとサウロの教えていることについて知りたいと思いました。バルナバとサウロは、よろこんでその地方総督にイエス様の話をしましたが、サタンは彼らの働きをやめさせようとしました。サタンは、エルマという名の魔術師〔サタンの力によって魔術を行う者〕を用いました。地方総督は、すっかりエルマのことを信じてしまいました。エルマの言うことが、サタンから来ていることを知らなかったからです。6,7 節。

バルナバとサウロが地方総督にイエス様の話をしていることを聞きつけたエルマは、彼らの話を信じさせないように邪魔をしたのでした。8 節。

サウロはエルマをじっとにらみつけ、聖霊に示された言葉を告げました。すると何が起こりましたか? 9-12 節。



考えてみよう:

この戦いでも、サタンがやぶれました。サタンよりもイエス様のほうが強いことを、あなたはうれしく思っていますか?

水曜日

バルナバとサウロは、真の伝道者でした。しかし伝道者であることは、決して簡単なことではありませんでした。サタンがイエス様のことを人々に信じさせないために、あらゆる手をつくしていたからです。それでも、ますます多くの人がクリスチャンになっていました。

使徒 13:9 に書かれているサウロの名前について、何か気づきませんでしたか?サウロには２つの名前があり、もうひとつの名前が「パウロ」でした。これから学んでいく聖書のお話では、彼の名前が「パウロ」になっているので、これからは私たちもパウロと呼ぶことにしましょう。

ある安息日、別のところにあるアンテオケという町で、パウロとバルナバは会堂を訪れました。そこの会堂司はパウロとバルナバに、何か人々に話すことがないかとたずねました。14,15 節。

パウロとバルナバは、こうたずねられたことをよろこんだと思いますか?もちろんですとも!ふたりはよろこんで、人々にイエス様のことを話しました。16 節。

パウロの説教は、とても力強いものでした。彼は、イエス様だけが、わたしたちを救うことのできるメシヤであることを、旧約聖書から示しました。聞いていた人

たちは、パウロの語っていることが真実であると確信しました。パウロが説教を終えると、どうなりましたか？ 42-44 節。

なんとすばらしいことでしょう！イエス様についての福音は、広まる一方でした。当然サタンは、このことをよく思いませんでした。まもなくして教会の指導者たちが騒ぎを起こしたので、パウロとバルナバは町を去らなくてはなりませんでした。49,50 節。

考えてみよう：福音を耳にした人々は、自分でどちらかを選ばなくてはいけませんでした。今日の人々も同じでしょうか？

木曜日

パウロとバルナバは、アンテオケからイコニオムへ行き、安息日には会堂でイエス様についての説教をしました。そこでもアンテオケと同じように、イエス様を信じようとしない人たちによって、さわぎが起こされます。使徒 14:1,2。

それでもパウロとバルナバは、ひたすら伝道の働きをつづけました。そしてイエス様は、彼らをとおしてすばらしい奇跡を起こしてくださったのです。3 節。

パウロとバルナバを見たり、彼らの話を聞いたりした人々の中には、イエス様を信じた人たちもいれば、そうでない人たちもいました。信じなかった人たちは民の指導者らといっしょになって、パウロとバルナバを殺そうとさえしました。4,5 節。

友人たちが敵のくわだてをパウロとバルナバに警告してくれたので、ふたりは急いで別の町へ逃れました。彼らはそれでも、伝道をつづけたでしょうか？もちろんです！ 6,7 節。

彼らが訪れた場所のひとつに、ルステラという町がありました。そこにはひとつの会堂もなく、ほとんどの人が異教徒でしたが、彼らの中には、パウロとバルナバの説教に耳をかたむける人たちがいました。ある日、パウロがイエス様の話をしていると、歩くことのできない男が熱心に聞き入っているのを目にしました。この男はいちども歩いたことがありませんでしたが、イエス様についてのすばらしい福音を信じていることが、パウロにはわかりました。パウロは何をしましたか？何が起こりましたか？ 8-10 節。

考えてみよう：目の前でこの奇跡を見た異教徒たちは、どう思ったでしょう？そのことは、明日のお勉強で学びます。

金曜日

イエス様は、パウロの伝道活動をとおして、ルステラの歩けなかった男をおいやしになりました。異教徒たちが興奮して叫ぶ中、パウロとバルナバは少しの間休もうと、泊まっていた場所へ行きました。ところがとつぜん、外から音楽

と叫び声が聞こえます。

一体何が起きているのかを知ろうと、パウロとバルナバが外へ出てみると、人々が自分たちの信じる異教の神々の名前でパウロとバルナバを呼んでいます。これらの異教徒たちは、パウロとバルナバの奇跡を見て、異教の神々が天からおりて来たと思いこんだのでした。人々は興奮し、熱狂していました。異教の祭司がやってきて、パウロとバルナバに犠牲の供え物をささげる始末です。大変なことになってしまいました！使徒 14:11-13。

パウロとバルナバは、着ていた着物を引きさいて、異教徒たちのしていることに対する自分たちの気持ちをあらわしました。ふたりは群衆の中に飛びこんでいき、パウロがこう叫びました。「わたしたちは神様ではありません。皆さんと同じ人間です。わたしたちがここへ来たのは、真の神様のことを皆さんにお話しするためです。」14,15 節。

やっとのことで、そのお祭りさわぎはやみましたが、やめさせるのは簡単ではありませんでした。18 節。

後になって、パウロとバルナバを拝もうとしたこれらの人々は、パウロを殺そうとします。なぜでしょう？これらの異教徒たちをこれほどすばやく心変わりさせるために、サタンが用いたのはだれでしたか？19 節。

しかしルステラには、イエス様を受け入れた人たちもいました。彼らはイエス様に忠実で、まごころをつくす人たちでした。ここでイエス様は、もうひとつの奇跡を起こしてくださいました。力強い伝道者パウロの働きが、ここで終わらないことを示すために、イエス様は何をなさいましたか？20 節。

翌日、パウロとバルナバはルステラを去りました。

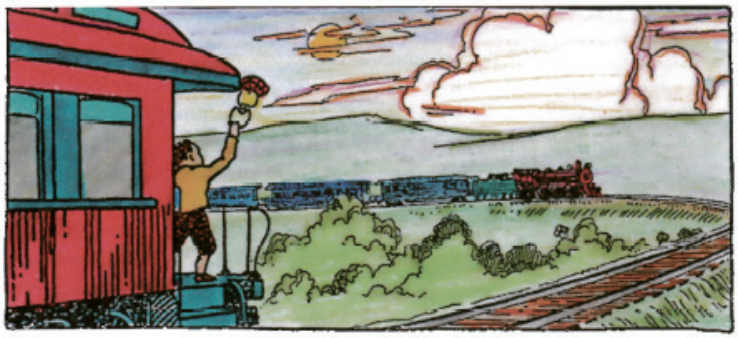
考えてみよう：今週わたしたちが学んだパウロとバルナバに起こったお話のすべてを、思い出せるかぎり話してみましょう。お約束どおり、イエス様が彼らと共におられたことは、どのように示されましたか？イエス様は今でも、勇敢な伝道者たちと共にいてくださいますか？

もっと学ぼう！

★使徒 11:19-26;13 章 ;14:1-20;
★ 患難から栄光へ 16, 17, 18 章
p. 191-199;

汽車を救ったジョニー　その2

作者不詳エイミー・シェラード編



ひとりぼっちのジョニーを乗せたままはずれてしまった車両は、ゆるやかな坂の線路上を進みつづけます。急行列車は、その同じ線路上をまっすぐこちらに向かって走ってきます。このままでは大変な大事故になることに、ジョニーは気づきました。きっと自分は死んでしまうだろうと思いました。自分だけでなく、あの急行列車に乗っている人たちも危険です。いったい、ジョニーに何ができるというのでしょう？

とつぜん、ジョニーは母親に言われたことを思い出しました。彼はひざまずいて祈りました。「イエス様、お願いです。どうか、僕を助けて下さい！何をすべきか教えてください！」

ジョニーが立ち上がると、車両ストーブの横にある、父親の赤い手さげランプが目にとまりました。しかも、そのランプは点灯しています。ジョニーはすばやくそれを手にとって、後ろのデッキへ飛び出し、その赤いランプを上下にゆらしました。それは、危険を示す信号です。ああ、だれか、急行列車に乗っている人が気づいてくれますように！ジョニーはそう願いました。

急行列車に乗っていたひとりの火夫〔汽車を動かすために火をたく人〕が、線路をながめていました。彼はジョニーの赤いランプを見て、何かがおかしいと気づきました。

「前方、危険あり！」火夫は機関士に叫びました。機関士はブレーキをかけ、できるかぎりすばやく列車を止めました。ジョニーを乗せた車両が近づいてきたときには、本線から待避線に避難して、まもなく安全に止まろうとするところでした。もう大丈夫です。イエス様がこれほどすぐに、お祈りに答えて下さったことを思うと、ジョニーは身震いしました。

ジョニーが見ると、列車から飛び出してきた乗客らが「いったい何があったんだ？」と、おびえた様子でたずねあっています。

何が起こったのかを知った乗客たちは、はずれた車両のデッキで赤いランプを手にしてたたずんでいる、勇敢なジョニーのほうへ向き直り、彼に拍手を送りました。ジョニーが彼らの命を救ったことがわかったからです。しかしジョニーは、自分が何をするべきかを教えてくださったのは、イ

エス様であることを知っていました。

急行列車はジョニーを乗せ、駅へ帰ってきました。そこではジョニーの父親が、ひどく心配して待っていました。ジョニーが無事なのを見た父親は、どれほど感謝の思いに満たされたことでしょう!まもなくして、うれしそうな少年と父親は、手をつないで家路を急ぎました。

その夜、親子３人は、わずか８歳のジョニーの祈りにこたえて、天使を送ってくださったイエス様に感謝の祈りをささげました。多くの命を救うために、ジョニーがランプをふることをすぐに思いつくよう、イエス様が助けて下さったことを、ジョニーの家族は知りました。

わたしたちは、あの夜ジョニーがしたように、劇的な方法で多くの人の命を救ったことはないかもしれません。しかし、イエス様の助け手となることを日々学ぶならば、わたしたちはイエス様をよろこばせることができます。そしてそのことが、ほかの人たちを幸福にすることにつながるのです。

あなたは、どうすれば良い助け手になれるかを学んでいますか?

（おわり）

第3章
イエス様への賛美

子供のための日々の聖書研究ガイド

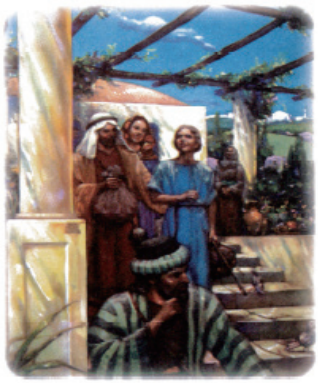
暗唱聖句

「主イエスを信じなさい。
そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。」
使徒行伝 16:31

日曜日

パウロとバルナバは、しばらくの間、アンテオケの大きな教会にもどっていましたが、長い旅の間に訪れた人々や、自分たちが始めたあちこちの教会のことを忘れてはいませんでした。ある日パウロは、「教会員たちがうまくやっているかどうか、ようすを見にいこう」と言いました。そしてバルナバは、それに賛成しました。使徒 15:35,36。

最初の伝道旅行は、バルナバの若い甥であるマルコもいっしょでした。マルコはイエス様を愛し、イエス様のために働きたかったのです。ところがまもなくして、伝道者の働きは、つらくて大変であることが分かりました。しばしば危険な目にもあいました。マルコはすっかり恐ろしくなり、家が恋しくなって、帰って行ってしまいました。しかし後になって、彼はそのことを後悔し、ふたたびイエス様のために働きたいと願っていました。



パウロとバルナバが次の伝道旅行を計画したとき、バルナバはマルコをつれて行きたいと思いました。こんどこそ、マルコが旅の途中で投げ出すことはないと、バルナバは確信していたからです。彼はマルコに、イエス様の伝道者になるチャンスを、もういちど与えたいと思いました。37 節。

***考えてみよう:** バルナバがもういちど、マルコにチャンスを与えたいと思ったことを、あなたは喜んでいますか?マルコは、次の伝道旅行に同行できましたか?どうなったのかは、明日お勉強しましょう。*

月曜日

バルナバが次の伝道旅行にマルコをつれて行きたいと言ったとき、パウロはそれに賛成できませんでした。大変な目にあうことに

なったら、マルコはまたも途中で投げ出して帰ってしまうのではないかと恐れたからです。最終的に、バルナバはマルコを、パウロはだれかほかの人をつれて行くことにしました。パウロといっしょに行くことになったのは、だれでしたか？使徒 15:38-40。

バルナバとマルコはキプロス行きの船に乗り、パウロとシラスは、ほかの場所をいくつも訪れるために旅立ちました。41節。

その後、マルコがふたたび途中で投げ出して帰らなかったか、あなたは気になっているかもしれませんね。彼は、バルナバの忠実な助手として最後までがんばったので、パウロからも信頼されるようになりました。パウロは、マルコがイエス様のすばらしい働き人になったことを、大変喜びました。第 2 テモテ 4:11。

シラスと共にトロアスと呼ばれる町へ着いたパウロは、マケドニアへ行ってイエス様のことを伝えるようにと、幻によって示されました。すぐに、医者のルカをつれてそこへ向かいました。使徒 16:9-11。

ピリピはマケドニアではよく知られた町で、パウロとシラスはそこに何日か滞在しました。彼らは安息日に何をしましたか？12,13 節。

パウロは婦人たちに、イエス様のことを話しました。その中のひとりで、ルデヤという女性は、紫色の布を売る仕事をしていました。ルデヤとその家族がバプテスマを受けたあと、彼女はパウロとシラスを家に招いて、何をしてほしいと頼みましたか？ 14,15 節。

考えてみよう：パウロとシラスは居心地のよい場所に住まわせてもらい、人々はイエス様のことを学ぶことができました。神様がなぜ、この弟子たちをマケドニアにつかわしたのか、あなたにはわかりますか？

火曜日

パウロとシラスがピリピの町で伝道するのをやめさせたかったサタンは、奴隷であったひとりの少女を使うことにしました。彼女に占いをさせて、奴隷主人たちは、お金をたくさんもうけていました。パウロとシラスの後についていきながら、彼女は何と言いつづけましたか？使徒 16:16.17。

この奴隷の少女が言いつづけていたことは、確かに本当でしたが、彼女にそれを何度もくり返し言わせていたのはサタンでした。彼女の言葉を聞いた人々は、彼女にはパウロとシラスの持つ力と同じぐらいの力が宿っていると思ったかもしれません。彼女がパウロ

とシラスの後をついていたある日、何が起こりましたか？ 18 節。

人々は、パウロとシラスに宿る神の霊が、奴隷の少女に宿るサタンの霊と同じでないことを知りました。計画がうまくいかなかったので、サタンははげしく怒りました。でも、ここでサタンがあきらめたと思いますか？もちろん、そんなことはありません。

奴隷の少女の主人たちも、はげしく怒っていました。自分たちの奴隷であった少女が、とつぜんサタンから解放されたので、彼らはパウロとシラスを非難しました。彼女を使って、金もうけができなくなったからです。そこで、彼らは何をしましたか？ 19-21 節。

考えてみよう：これらの奴隷主人たちが、町の役人たちに語ったことは真実でしたか？役人たちは、パウロとシラスをどうすることに決めましたか？

水曜日

このお話に出てくる奴隷の少女の主人たちは、パウロとシラスに対してはげしく怒り、ふたりを引きずって町の役人のところへ連れて行きました。まもなく群衆が集まり、彼らは怒鳴りだしました。町の役人たちは、それを止めようとすらしません、それどころか、彼らはパウロとシラスをむちで打つように命じたのでした。使徒 16:22。

町の役人たちは、パウロとシラスを牢獄に入れ、獄の番人に「このふたりが逃げないよう、しっかり見張るように」と言いつけました。そこで番人は、奥の暗い部屋にふたりを閉じこめ、これで絶対に逃げ出すことはできまいと考えたのでした。さらにふたりの足をきつく縛り、鎖でつなぎました。こうしておけば、立つことすらできません。23,24 節。

帰る途中、町の役人たちは、パウロとシラスが悪人ではなく、実はとてもよい働きをしていたことを知りました。また奴隷の少女に会い、彼女が以前とはまるで別人になっていることも分かりました。今になって役人たちは、パウロとシラスをむちで打たせ、牢獄に入れるべきではなかったことを悟りました。そこで、夜が明けたらパウロとシラスを解放することに決めたのでした。

暗い牢獄の、何もしかれていない冷たい床にすわっていたパウロとシラスは、どんな気持ちだったと思いますか？足を動かすことはできません。ひどいむち打ちによる傷のために、背中からは血が流れ、ひどく痛みます。それはそれは、ものすごい痛みでした！もしほかの人が同じような仕打ちを受けたとしたら、その人はおそらく、叫び声をあげ、うめき、のろ

いの言葉を吐いたことでしょう。けれどもパウロとシラスは、不平すらこぼしませんでした。彼らは、自分たちには心強い味方がいることを知っていました。彼らとともに、天使たちがいることを。ひどい傷を負っていましたが、イエス様のために苦しみを受けることをよろこんでいました。

互いに、「さあ、祈ろう!」と言って、はっきりと大きな声で祈りました。「さあ、賛美しよう!」と言って、パウロとシラスは歌をうたいました。とても大きな声でうたったので、ほかの囚人たちにも聞こえるほどでした。25節。

考えてみよう：もしあなたがパウロとシラスのように傷を負っていたとしたら、彼らのように歌うことができたと思いますか？

木曜日

パウロとシラスは、暗い牢獄の中で賛美の歌をうたい、祈っていました。ほかの囚人たちはその声に耳をかたむけていましたが、番人はまもなく眠ってしまいました。

真夜中になって、とつぜん、まばゆい光が牢獄を照らしました。牢獄の扉がぱっと開いて、すべての囚人たちの鎖がはずれました。使徒 16:25,26。

番人が、あわてて寝床から飛び起きて見ると、牢獄の扉がすべて開いているではありませんか。彼は恐ろしくなってしまいました。パウロもシラスも、ほかの囚人たちもみんな逃げてしまったにちがいありません。番人は、きっと責任を問われて殺されるでしょう。27節。罰として仕事をやめさせられ、群衆の前で殺されるよりは、むしろ自分で命を絶つことを決心しました。27節。

この番人が、剣を抜いて何をしようとしているのかがわかったパウロは、「やめなさい!」と叫びました。「死んではいけません!わたしたちは皆、ここにいますから。だれも逃げてはいません。」神様を信じ敬うパウロとシラスの態度が、ほかの囚人たちに感動を与えていたので、だれも逃げ出すことなく、牢獄にとどまっていたのです。28節。

番人は、もっていた剣を落としました。それからあかりを手にもち、急いでパウロとシラスのところへやってきました。番人は震えながらひざまずき、パウロとシラスをこんなにも痛めつけたことを許してほしいと、けん命に願ったのでした。29節。

それから番人は、パウロとシラスを外へつれ出しました。ほんの数分前、彼は死のうとしていました。ところが今、さっきとはちがう思いが心の中を占めていました。彼は、この地震を起こされた神様、また、囚人たちに逃げることを思いとどまらせた力ある神様について、もっと知りたいと思いました。また、あれほど痛めつけられた後でさえ、パウロとシラスが歌い、祈ることのできるようにして下さる神様を

知りたいと思いました。番人はパウロとシラスに、何とたずねましたか？彼らは何と答えましたか？30,31節。

考えてみよう：パウロとシラスが牢獄の番人に対してこれほどまでに優しくすることができ、さらに彼をゆるすことができたのはなぜでしょう？

金曜日

まだ夜は明けていません。パウロとシラスは番人と話をしています。ふたりは、牢屋に入れられても、まったく怒ってはいませんでした。パウロとシラスと番人は、何をしましたか？使徒 16:32-34。

なんとすばらしいことでしょう！その晩、番人の家族全員がイエス様のことを学び、バプテスマを受けたのです。

朝になると、町の役人たちはつかいを送り、牢獄の番人たちにパウロとシラスを釈放するようにと伝えさせました。ところが、このうれしい知らせを聞いたパウロの答えに、番人たちはひどくおどろいたにちがいありません。35-37節。

実は、この町の役人たちは、パウロがローマ市民であることを知りませんでした。パウロとシラスをむちで打ち、裁判にもかけずに投獄したことによって、役人たちはローマの法律を破っていました。これはとても重大なことでした。多くの人が、パウロたちの身に起こったことを知っていたので、パウロは彼らに真実が告げられることを願っていました。つまり、パウロとシラスが無実であることを知る必要がありました。

大変なまちがいを犯してしまったことに気づいた町の役人たちは、すっかり恐ろしくなってしまいました。このようなことをして、ただではすまないだろうと思いました。そういうわけで、パウロとシラスのところへやってきた役人たちの態度は、とてもていねいでした。38,39節。

パウロとシラスは、町の役人たちと話し終えた後、すぐにピリピの町から出て行ったのではありません。ほかの場所へ伝道に行く前に、もういちどルデヤの家にもどり、少しの間そこで過ごしました。彼らが町を去ったあと、多くの人が牢獄で起こった奇跡の話を聞き、イエス様のことを知りました。40節。

考えてみよう：神様は、悪いことが起こっても、それを良いことに変えることがおできになりますか？イエス様は今でも、パウロとシラスのように勇敢な伝道者を必要としておられるでしょうか？わたしたち子供は、大人になるのを待たなくても、伝道者になれますか？どうすればそうなれるでしょうか？

もっと学ぼう！

★使徒 15:36-41；16:8-40

★患難から栄光へ 20, 21章 p. 216-218；

お父さんのためのジェーンの祈り

作者不詳 エイミー・シェラード編

ジェーンのお父さんは、クリスチャンではありませんし、教会にも行きません。でも、とても優しいお父さんで、幼い娘をとてもとても愛していました。夜、仕事から帰ってくるといつも、ジェーンが寝る前の時間をいっしょにすごします。ある夜、お父さんの帰りが、いつもより遅くなってしまいました。

「ジェーンは?」帰って来たお父さんは、お母さんにたずねました。

「今、寝たところよ。」お母さんは言います。

「じゃあ２階へ行って、そーっとおやすみのキスをしてくるかな。」お父さんは、そうすることにしました。

お父さんは、眠っているかもしれないかわいい娘を起こさないように、つま先で階段を上がりました。ところが部屋のドアに近づいたとき、かわいいジェーンがベッドのそばでひざまずいているのが見えました。そして、彼女がイエス様と話すのが聞こえたのです。

「愛するイエス様、どうかお父さんが、あなたを愛することができるように、助けてください。そして、お父さんが教会に行って、あなたのことを学べますように、どうぞ助けてください。」

お父さんは、ジェーンのお祈りが終わるまで待っていました。それから部屋へ入って、いつも寝る前にするように、ジェーンを強く抱きしめて、おやすみのキスをしました。階段をおりてからも、お父さんはジェーンのお祈りのことをずっと考えていました。そして、なんども何度もそのことが頭にうかんできました。

ジェーンはなんどもお父さんに、家族みんなで教会に行こうと頼んだことがありました。でもそのたびに、お父さんは優しく断っていました。ところが今は、ジェーンのお祈りがくり返し心にひびいて、お父さんの頭からはなれません。とうとうお父さんは、次にジェーンから教会へ行くように誘われたら、ただ彼女をよろこばせるためだけに行こうと決めたのでした。

それほど長くたたないうちに、ジェーンはふたたびたずねました。「ねぇお父さん、お願いだから、今日の夜、わたしたちといっしょに教会に行ってくれない?」お父さんがにっこりほほ笑んで「ああ、いいとも」と言うと、ジェーンは大変よろこびました。彼女は心の中で、「イエス様がお祈りに答えてくださったわ」と叫びました。

その晩お父さんは、牧師先生のお話を、耳をすまして聞いていました。お話のあと

も、お父さんはそのことについて考えていました。それからお父さんは、ジェーンとお母さんといっしょに、なんども教会へ行くようになりました。そしてまもなく、イエス様と神様についてのお父さんの考えは、変わり始めました。お父さんはクリスチャンになりたいと思うようになりました。またイエス様を愛し、彼にしたがいたいと思いました。

ある夜のこと、お父さんが愛するジェーンを強くだきしめ、おやすみのキスをするとき、「ジェーン、君のイエス様は、わたしのイエス様にもなるんだよ」と言ったのです。ジェーンとお母さんは、どんなによろこんだことでしょう!これからは、いつもイエス様を愛する、幸せな家族になるでしょう。いっしょに家庭礼拝もするでしょうし、そろって教会にも行きます。イエス様は、クリスチャンになることをお父さんに考え始めさせるために、ジェーンの祈りを用いられたのでした。

ほかの人のために祈るとき、イエス様はおよろこびになります。あなたの知っている人の中には、イエス様のことをよく知らないために、彼を愛していない人がいますか?あなたは、そのような人たちのために祈っていますか?

第4章

伝道者になったテモテ

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「ここ〔ベレヤ〕にいるユダヤ人はテサロニケの者たちよりも素直であって、心から教を受けいれ、果してそのとおりかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べていた。」
使徒行伝 17:11

日曜日

少年テモテは、ルステラの地で育ちました。彼の父親はギリシャ人、母親はユダヤ人で、皆、神様を深く愛していました。テモテは物心のついた〔世の中のことがなんとなくわかり始める〕ころから、母のユニケと祖母のロイスが、彼に聖書を教えました。彼が子供のころに使っていた聖書は、わたしたちが現在『旧約聖書』と呼んでいるものです。これは聖書の一部で、イエス様がお生まれになる前に書かれたものです。使徒 16:1,2; 第2テモテ 1:5。

あなたの知っている旧約聖書の物語は、テモテも知っていたのですよ。そしてあなたと同じように、彼もそれらのお話を聞くのが大好きでした。あなたと同じように、テモテは神様を愛し、安息日に礼拝をしていました。けれども、まだイエス様のことを知りませんでした。いつか神様がメシヤ〔救い主〕を送ってくださるという約束は知っていましたが、そのメシヤがもうすでに来られたことを知らずにいました。彼は、イエス様がメシヤであることを知らなかったのです。

ルステラには大勢の異教徒がいたので、きっとわくわくするような異教の行事が、いくつもあったはずです。しかしテモテは、幼いころから神様に忠実であることと、神様の十戒にしたがうことを選んでいました。

テモテと彼の母親と祖母は、ルステラにやってきたパウロとバルナバが、イエス様の話をしているのを聞きました。聖書に書かれている預言者たちの言葉を調べてみると、パウロとバルナバの話が真実であることがわかりました。そして、何名かの人たちといっしょに、彼ら

もイエス様の信者になったのです。

パウロとバルナバがルステラにいる間、テモテはあることがきっかけで、自分が将来どのような人になりたいかを考え始めます。次の課では、テモテに何が起こったのかを学びます。

考えてみよう：ルステラで異教徒たちがしていたことが、テモテを誘惑することもあったでしょうか？楽しくてしかたがないくらい、あなたの心をひきつけるものは何ですか？あなたはこれらの誘惑に対し、どうしていますか？

月曜日

テモテは、パウロとバルナバをとても尊敬していました。ひょっとするとテモテは、足の悪かった男がパウロによっていやされる奇跡を、ルステラで見たかもしれません。**使徒 14:8-10**。

あの日、異教徒たちがどれほど興奮していたか、テモテは見て知っていました。パウロとバルナバは、天からおりてきた神々にちがいないと思われてしまったのでした。もしかするとテモテは、群衆と異教の祭司が犠牲のささげ物までもって来て、パウロとバルナバを拝もうとするのを見たかもしれません。また、騒ぎの中、そんなことをしてはいけないとパウロが人々に大声で叫んだのを、聞いていたかもしれません。

ところが、アンテオケからやってきた悪い人たちは、この勇敢なふたりの伝道者に敵対するよう、人々をそそのかしました。そこで人々ははげしく怒って、パウロに石を投げつけたのでした。石に打たれて死んだと思われたので、彼は町の外に引きずり出されました。**19 節**。

テモテと、ほかのイエス様の信者たちは、横たわっているパウロのところへ行きました。おそらく彼らは、死んだと思われたパウロを囲んで、泣きながら祈ったことでしょう。ところがとつぜん、何が起こりましたか？ **20 節**。

パウロの全身は、傷と血だらけでしたが、それでも生きていました。パウロはイエス様のために苦しむことを、特別な栄誉だと感じていたほどでした。青年テモテは、これを見て強く心を動かされ、自分もイエス様のために勇敢な伝道者になりたいと思い始めます。

考えてみよう：あなたはこれまで、イエス様のために、勇敢な伝道者になりたいと思ったことはありませんか？伝道者になるためには、家を出てどこか遠くに行かなくてはなりませんか？

火曜日

パウロとバルナバは、それぞれ、

最初の伝道旅行で訪れたあちこちの教会の信者たちをたずねることにしました。バルナバはマルコといっしょにキプロスへ行き、パウロはシラスをつれて別の場所へと向かいました。

パウロとシラスが訪れた町のひとつが、ルステラでした。テモテはそこに住んでいて、パウロはそこで石を投げつけられたわけです。ルステラのクリスチャンたちがイエス様に忠実であることを知ったパウロは、どれほどうれしかったことでしょう!

パウロは、テモテのことを忘れていませんでした。神様がテモテのために特別な働きを用意しておられると、パウロは確信していました。そしてテモテのほうも、パウロが石で打たれたときのことが心に焼きついて、その印象がうすれることはありませんでした。テモテは、イエス様のための伝道者になりたいのだと、はっきりわかりました。

テモテがどのような人物なのかを知るために、パウロはできるかぎり注意ぶかく調べました。間もなく、テモテの母と祖母が、テモテに聖書をしっかり教えていたことが分かりました。パウロは、テモテが心からイエス様を愛していることも知りました。

パウロから、いっしょに来てほしいと頼まれたとき、テモテがどれほど心をおどらせたか、想像してみてください。「こんなに年若い僕でも、真の伝道者になれるのだろうか?」と思ったかもしれません。でも母親と祖母は、テモテがパウロといっしょに伝道の働きをさせてもらえると聞いて、とても喜んだことでしょう。

テモテは、旅に必要な荷物をまとめました。それから両親と祖母に別れを告げて、パウロとシラスについて行きました。

考えてみよう:あなたがテモテだったら、どんな気持ちだったでしょうか?

水曜日

パウロとシラスに、新たな働き人が加わりました。テモテです。旅の間中、パウロとシラスは、テモテがイエス様のための強力な伝道者になれるように、できるかぎりの手助けをしました。パウロはテモテのことを、自分の息子のように愛するようになりました。

テモテには特にすぐれた才能などはありませんでしたが、イエス様を愛し、毎日、イエス様に似る者となる選びをしていました。そして、どうしてよいかわからない時には、パウロに助言を求めました。

伝道者としてパウロに同行するのは、かんたんなことでしたか？いいえ。彼らの行くところではどこでも、彼らの働きをじゃましようとする人たちがいました。テモテと医者のルカは、パウロとシラスと共にピリピの町へ行きました。そこは以前、パウロとシラスが町の役人たちによって牢屋に入れられたところです。ここでもテモテは、イエス様がどんなに力のあるおかたであるかを見せられました。

ピリピを後にした宣教者たちが次に向かったのは、テサロニケと呼ばれる町です。ここでもパウロは、安息日に会堂で大胆に語り、多くの人がイエス様にしたがう選びをしました。**使徒 17:1-4**。

しかしそこにも、パウロが真理を話しているのかどうかを調べようもしない人たちがいました。

考えてみよう：多くの人は、何が真理かを聖書で調べもせずに、まちがったことを信じていますか？聖書に書かれていないのに、多くの人が信じていることは何ですか？

木曜日

パウロとシラスの説教を聞いて、テサロニケの多くの人たちが、イエス様を信じるようになりました。しかし、信じない人もたくさんいました。そして彼らは、パウロとシラスが説教するのをやめさせたいと思いました。さわぎを起こすグループを仲間に引き入れて、パウロとシラスの悪口を大声で叫ばせました。群衆が集まってくると、彼らはヤソンの家へ行きました。そこに伝道者たちが泊まっていると思ったからです。彼らはパウロとシラスを、外にいる乱暴な群衆のところへ連れ出そうとたくらんでいたのです。**使徒 17:5**。

乱暴な群衆はヤソンの家に行きましたが、パウロとシラスを見つけることはできませんでした。そこで彼らはますますはげしく怒り、何をしましたか？**6,7 節**。

町の司たちのところへ引っ張られて行った者の中に、テモテがいたかどうかは分かりませんが、何が起こったのかは彼も知っていたはずです。

群衆のリーダーたちが言ったことは、町の役人たちを不安にさせました。でも彼らは、ヤソンとほかの人たちを家に帰してくれました。結局のところ、彼らが本当につかまえたかったのは、パウロとシラスだけでした。**8,9 節**。

これ以上さわぎが大きくなるのを恐れた新しい信者たちは、その夜のうちに、パウロとシラスをベレヤの町へ行かせました。パウロとシラスは、数日だけでも休みをとったでしょうか？いいえ。彼らはすぐに、イエス様の働きを始めました。サタンは、ふたりを止めることはできなかったのです。**10 節**。

ベレヤの人々は、テサロニケの人々とはちがっていました。そのちがいは何でしたか？**11,12 節**。

考えてみよう：イエス様の真の信者であるならば、自分たちがイエス様にしたがっている理由を知る必要があります。真の信者は、聖書が教える「するべきこと」を

知る必要があります。なぜ安息日を守るのか、あなたはほかの人に説明できますか？安息日を守るように命じている戒めを、あなたは暗記していますか？

金曜日

ベレヤの人々がひじょうに注意ぶかく勉強したことを、パウロとシラスはよろこんでいました。ところが、しばらくたたないうちに、ふたりはまたしても危険な目にあうことになります。パウロとシラスが、テサロニケからそれほど遠くないベレヤにいることを、乱暴者のリーダーたちに知られてしまったのです。乱暴者たちは、テサロニケでしたのと同じように、群衆をそそのかしてパウロに敵対させました。使徒 17:13。

テモテはパウロたちと働きを共にするために、ベレヤに来ていました。しかし、テサロニケの乱暴者のリーダーたちがベレヤに来て、大勢の人をけしかけてパウロに反対させようとしたのです。そこでクリスチャンたちは、急いで何をしましたか？14 節。

テモテを残して行かなければならなくなり、パウロはがっかりしていました。本当は、テサロニケにもどりたいと願っていたほどです。しかし、その願いはかないませんでした。パウロは今、遠くはなれたギリシャの中心地、アテネに向かっていました。

ベレヤの新しい信者が何人か、パウロについて行きました。おそらくパウロは、旅の道中で、できるかぎりイエス様のことを教えたでしょう。

この小さな旅の一団を、天使たちが見守っていました。そして、パウロが無事アテネに到着するとすぐに、新しい信者たちはベレヤへと帰って行きました。彼らはパウロからどのような伝言をあずかりましたか？15 節。

考えてみよう：テモテは、あなたのようにまだ年若かったころに、聖書を愛することを学びました。あなたも、聖書を愛する子供になっていますか？年若いテモテのように、あなたも毎日聖書を勉強するのが好きですか？

もっと学ぼう！

★使徒行伝 17:1-15

★患難から栄光へ 20、22、23 章 p. 249-251

デイビーの手紙 その1

作者不詳 エイミー・シェラード編

ずっと昔、心の優しいひとりの少年がいました。名前がわからないので、ここではデイビーと呼ぶことにしましょう。デイビーには、ふたりの妹がいました。

父親は亡くなり、母親は未亡人となり、とても貧しい家でした。実際、母親が一生けん命働いているのに、家族のための十分な食べ物が買えないほど貧しかったのです。

生活はそれほど大変でしたが、母親はそのことを子供たちに話していませんでした。彼女はどうしていいかわからず、泣くことが何度もありました。デイビーに学校をつづけて欲しいと思っていましたが、彼が学校をやめて働かなくてはならないのは明らかでした。家族のために食べ物を買うお金が必要だったからです。ある日のこと、母親は、家の近くにある一軒のお店で、デイビーのための仕事を見つけました。そのことをデイビーに告げなくてはなりません。

その日の午後、デイビーが学校から帰ると、大切な母親が泣いています。「お母さん、どうしてそんなに悲しんでいるの?」彼は腕を母親にまわし、抱きしめました。

母親はしくしくと泣きながら、「ごめんね、デイビー」と言いました。「あなたに、学校をつづけて欲しいってどんなに思っていたか。でも、家があまりにも貧しいから、わたしたちが生活していくために、あなたが働かなくてはならないの。そうでもしなければ、必要な食べ物すら買えないのよ。」それから母親は、息子のために見つけた仕事のことを話しました。

本当は、デイビーも学校をつづけたかったのです。しかし、ひどくがっかりしていたにもかかわらず、彼はにっこりと笑って母親を抱きしめました。「心配しないで、お母さん。」デイビーは元気に答えました。「僕、一番の働き者になるって、約束するよ。」

母親はまだ悲しんでいましたが、これほど明るい、自分のことよりも、家族の役に立ちたいと願っているデイビーにどれだ

け感謝したことでしょう。次の日から早速、デイビーは仕事場へ行きました。

彼は、お店の仕事をすぐに覚えました。そして、店の主人をよろこばせようと、手早くきちんと仕事をするようにしました。

店の主人に「デイビー!」と呼ばれると、彼はすぐにやってきます。「これを郵便局に持って行ってくれないか?」主人は、1枚の封筒をデイビーに手渡しながら言いました。封筒には住所が書かれ、切手もはられ、あとは送るだけです。

「承知しました、ご主人様。」デイビーは礼儀正しく答えながら、封筒を受けとりました。それから、封筒をもって、急いで郵便局へ行きました。郵便局長はデイビーのことを知っています。デイビーが封筒をわたすと、彼はにっこりと笑いました。デイビーは、自分の仕事について話しました。局長は話を聞き、デイビーから受けとった封筒を見てこう言いました。「正しい住所を書いて、必要な分の切手をはれば、これが世界中のどこにでも届くなんて、すばらしいと思わないかい?」

デイビーはうなずきました。そう、それはすばらしいことです。こんなことを考えながら、仕事場へもどる道を歩いていると、彼にひとつのすばらしいアイデアが浮かびました。その日の残りの仕事時間、熱心に働くかたわらで、デイビーはこのアイデアのことを考えていました。そしてついに、それをやってみることに決めました。実行するのは、明日です。

（つづく）

第5章
福音の炎

子供のための日々の
聖書研究ガイド

暗唱聖句

「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと・・・それらのものを心にとめなさい。」ピリピ 4:8

日曜日

ベレヤで起こった問題のために、パウロはギリシャの重要都市であるアテネにつかわされていました。彼はそこで、テモテとシラスがベレヤから来るのを待っていました。

アテネの人々は、その美しい町並みと建造物を誇りに思っていました。とくに壮大な数々の神殿、それらの場所におかれている多くの像や絵画が自慢でした。彼らは様々なことがらについて論じたり学んだりすることに、多くの時間を費やしました。また、これまできずいてきた学問に誇りを持ち、自分たちをとても賢いと思っていました。

アテネをめぐり歩いたパウロは、そこではありとあらゆる神々が拝まれていることに気づきました。神々の像は、いたるところにありました。その中のある祭壇には、「知られざる神に」と書かれていました。この祭壇を見たパウロは、悲しい気持ちになりました。彼は思いました。「たしかにここアテネには、ひとりの知られざる神がおられるが、そのお方こそが、世界を創造なさったもっとも偉大な神様なのだ。そのお方こそが、唯一のまことの神であられるのに、ここの人々はその神様を知らない。彼らに、イエス様のことを伝えなくては!」と。使徒 17:16。

アテネにはユダヤ教の会堂があり、パウロはそこでイエス様のことを話しました。また市場でも伝道していたので、まもなく人々は、「この

新しい教師は、いったい何者だろう?」と考えるようになりました。そして、「この男が話している『イエス』とは、だれなんだろう?」と尋ね合いました。そこで人々は、パウロをある場所につれて行きました。そこはしばしば、聴衆を前にして、重要なことについて話される場所でした。19-21節。

考えてみよう:パウロは、力強い説教者でした。しかし、自分のことをとても賢いと思っている人々を、パウロは助けることができるでしょうか?話をするようにと招待してくれた男たちに連れられて行くとき、彼は心の中で祈っていたと思いますか?

月曜日

パウロは、アテネでも特にきわだって賢いという人たちの前に立っていました。彼らがイエス様のことを学んでくれたらと、どれほど願ったことでしょう!パウロは、これらの人たちがクリスチャンになって、偶像礼拝をやめることを望んでいました。

パウロは、「知られざる神に」と書かれた祭壇を思い出しました。そして彼が話し始めると、人々はその話に引きこまれていきました。パウロが最初に言ったことは何でしたか?使徒 17:22,23。

パウロがその場にふさわしい言葉を語ることができたのは、聖霊が助けて下さったからでした。これらの誇り高い賢人たちはすぐに、パウロも学識ある人であることが分かりました。しばらくの間、真の神様について語るパウロの話を、彼らは注意ぶかく聞き入っていました。ところが、イエス様が死んだ後に復活なさったことを話すと、ある人たちはパウロのことをあざ笑い始めました。また中には、これ以上聞きたくないと思う人たちもいました。人間を死から生き返らせるほどの力を持った神様が存在するなど、彼らには信じがたいことでした。

中には、パウロの言うことを信じた人もいましたが、自分たちはすぐれているという思いが強すぎたために、変わることができませんでした。彼らは、これまで自分たちの信じてきたことがまちがっていたとは、認めたくなかったのです。32節。

ほとんどの人が偶像礼拝をつづけることを選んだので、パウロは悲しくなりました。彼らは、これまで自分たちが行ってきたことを変えたくなかったのです。しかし一方で、わずかではありましたが、変えられた賢人たちがいたことを、パウロは感謝しました。アテネで過ごした時間は、すべてが無駄だったわけではありませんでした。

考えてみよう:イエス様が人々に教えておられたころ、彼の話を一番よく聞いていたのは、どのような人たちでしたか?お金持ちでしたか、それとも貧しい人たちでしたか?誇り高い人たちでしたか、それとも謙そんな人たちでしたか?

火曜日

パウロはアテネを去って、もうひとつの重要都市であるコリントへ

行きました。アテネと同じように、コリントも、多くの偶像礼拝者であふれていました。コリントで、パウロはだれのところに滞在しましたか？使徒 18:1-3。

すべてのユダヤ人男性は、少年のころから自分で働いてお金を得ることを教えられており、パウロは天幕づくりを学んでいました。説教をしてお金をもらっていたわけではなかったので、パウロは生活に必要なお金を得るために、あいた時間に一生けん命働きました。アクラとプリスキラも天幕づくりの職人でした。パウロは、このふたりと働くのがとても楽しかったようです。彼らはやがて、仲の良い友人になりました。そしてパウロはいつものように、安息日ごとに会堂で、イエス様のことを人々に教えていました。4 節。

シラスとテモテもコリントにやってきたので、パウロは、人々にイエス様のことを伝えるためにますます熱心に働きました。ところが、パウロの話をやめさせようとしたり、イエス様の悪口を言ったりする人たちもいました。5,6 節。

そこでパウロは会堂を去って、その近くに住むユストの家で説教をするようになりました。会堂司のクリスポがクリスチャンになったことを、パウロの反対者たちはひどく怒っていました。7,8 節。

パウロは、コリントを去って別の場所へ行くべき時なのかどうか迷っていました。これからどうするべきかを、パウロはどのようにして知りましたか？9-11 節。

考えてみよう：パウロがコリントを去るときまでには、多くの人がクリスチャンになっていました。イエス様の助けにより、パウロはそこで、しっかりした教会を始めることができたのでした。今日も、より多くの場所で教会がつくられていますか？

水曜日

パウロがコリントを去ると、天幕職人のアクラとプリスキラも彼について行き、こんどはエペソで天幕づくりを始めました。パウロはエルサレムへ行きたかったので、エペソには長くとどまりませんでした。それでも彼は、安息日に会堂でイエス様のことを伝えつづけました。大きな関心をもった人たちが、パウロに長く滞在してほしいと頼みました。パウロはその願いにこたえることはできませんでしたが、必ずもどってくるという約束を交わし、彼らの手伝いとして、アクラとプリスキラをそこに残して行きました。使徒 18:19-21。

パウロがいない間、アクラとプリスキラが、人々にイエス様のことを語りました。まもなくしてアクラとプリスキラは、別の町からエペソにやってきたアポロという名の男と親しくなりました。アポロはバプテスマのヨハネの説教を聞いたことがあり、バプテスマも受けていました。彼は聖書をよく知って

おり、力強い説教者でした。24,25 節。

アポロの話を聞いたアクラとプリスキラは、彼はもっと学ぶ必要があると思いました。イエス様が救い主であって、わたしたちは自分で自分を救うことができないことを、アポロは知らなくてはなりません。また彼は、イエス様に似る者となれるように、日ごとに助けて下さる聖霊についても知る必要がありました。そこで、アクラとプリスキラはどうしましたか？ 26 節。

アポロは、アクラとプリスキラが教えてくれたことをよろこんで受け入れ、イエス様の力強い伝道者となりました。彼がエペソを去るときに、これから訪問しようとしていた町々の信者たちにとどけさせようと、エペソの教会員らがことづけたメッセージは、どのようなものでしたか？ 27,28 節。

考えてみよう：イエス様を愛する人であれば、だれでも伝道者になれますか？あなたはどうでしょう？どうすれば、伝道者になることができますか？

木曜日

パウロは、エペソへもどってくるとの約束を果たしました。アクラとプリスキラがまだそこにとどまっていたなら、きっとアポロのことをパウロに話したでしょう。

間もなくパウロは、バプテスマのヨハネの説教を聞いたことのある、別の 12 人の男たちに会いました。彼らもアポロのように、バプテスマのヨハネからバプテスマを受けていました。けれどもアポロと同じように、彼らもイエス様と聖霊について、よくわかっていませんでした。パウロはよろこんで、彼らにイエス様と聖霊について教えました。使徒 19:2-7。

さあこれで、さらに 12 人の伝道者が、イエス様のために働くことになりました。彼らには、イエス様が天にお帰りになったあとで使徒たちに与えられたのと同じ「他国の言葉を話す能力」が、聖霊によって与えられました。

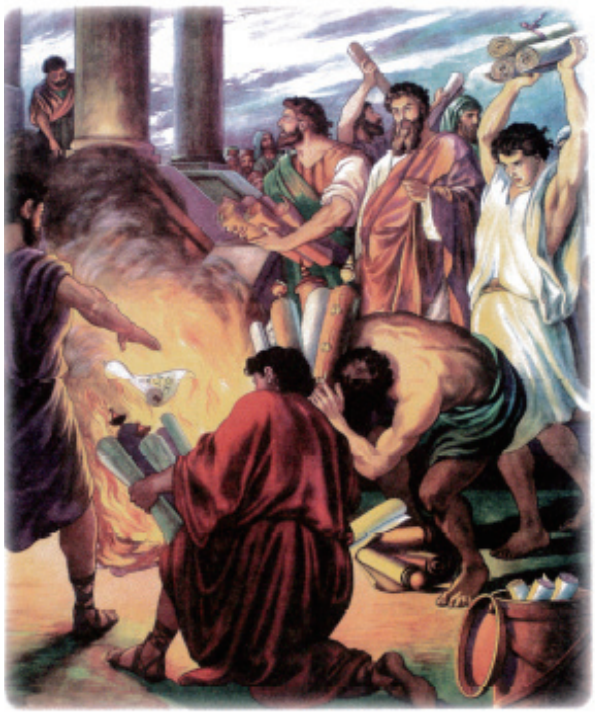
パウロは 3 か月の間、エペソの会堂で説教をつづけましたが、サタンはいつものように、人々にイエス様を信じさせまいと働きました。そこでとうとう、パウロはその会堂を去って、2 年の間、別の場所で教えることになりました。8-10 節。

神様はパウロをとおして、エペソですばらしい奇跡を行われました。病気やサタンに支配されていた信者たちに、何が起こりましたか？ 11,12 節。

エペソに、スケワという名の男がいて、彼には 7 人の息子がいました。その息子たちは、自分たちも奇跡を行いたいと思っていました。彼らは、サタンに支配されている男を見つけ、悪霊に向かって、男から出て行くようにとイエス様のみ名によって命じました。

最初、悪霊は彼らをからかいました。次に、悪霊は男の力をとても強くして彼らに飛びかからせました。7 人の息子たちは、命からがら逃げ出さなくてはなりませんでした。15,16 節。

考えてみよう：今でもサタンには力があ



りますか?たとえそうであっても、わたしたちがイエス様に信頼してしたがう選びをしているならば、安全でいられますか?

金曜日

昨日の教課で学んだ7人の兄弟に起こった出来事は、すぐに知れわたりました。使徒 19:17。

エペソの人々の多くは、偶像礼拝や魔術を行っていました。しかし中には、パウロの説教を聞いて偶像礼拝をやめ、真の神様を拝むようになった人たちもいました。それなのに、新しく信者になった人たちの多くが、まだ魔術をつづけていました。パウロはそのことを知らずにいました。

7人の兄弟に起こった出来事を聞いたあと、魔術を使いつづけていた人たちは、自分たちがサタンにしたがっていたことに気づきました。そこで彼らはパウロのところへ行き、これまでの誤りを告白したのでした。18節。

ただ、「私がまちがっていました」と告白するだけで十分でしょうか?いいえ。これらの人たちは、ただ口で告白する以上のことをする必要がありました。自分たちの持っていた魔術の本を、すべて処分するべきでした。でも、魔術の本は高いお金を出して買ったものだったので、ほかの人に売ることもできたはずです。彼らは、魔術の本を売りましたか? 19節。

これらの人たちは、心から悪かったと思っていましたね。魔術の本が焼かれるのを見ていた人たちは、彼らの選びについていろいろ考えさせられたことでしょう。魔術の本が焼かれたあと、エペソでは何が起こりましたか? 20節。

***考えてみよう:**あなたは、自分のしていることがサタンをよろこばせ、イエス様を悲しませると知っていながら、見たり読んだりしていることはありませんか?思い当たることがあれば、それを1枚の紙に書き出してみましょう。それから大人の人に手伝ってもらい、その紙を燃やしてみましょう。*

もっと学ぼう!

★ 使徒行伝 17:16-34;18章;19:1-20;
★患難から栄光へ 23、24、26-27章

デイビーの手紙　その2

作者不詳 エイミー・シェラード編

デイビーの母親は貧しい未亡人で、デイビーは家族を養うお金をかせぐために、学校をやめなくてはなりませんでした。店の主人に頼まれて手紙を郵便局にもって行ったデイビーは、あるすばらしいアイデアを思いつきました。

その晩、自分の小さな部屋で、デイビーは1枚の紙を取り出して、注意ぶかく何かを書きました。書き終えると、彼はそれを声に出して読んでみました。「愛するイエス様、僕のお父さんは死んでしまいました。そしてお母さんは、家が貧乏であることにいつも心を痛めています。僕が学校をやめなければいけなくなったので、お母さんはそのことをとても悲しんでいます。今は、僕が働いているので、十分な食べ物を買うお金があります。お願いです、僕のお母さんが悲しまないように、助けて下さい。」

それからデイビーは手紙を封筒に入れ、注意ぶかく住所とあて名を書きました。そこには「天国におられる主イエス・キリスト様へ」と書かれていました。

郵便局長は、手紙を見て困ってしまいました。だれが書いたものなのか見当がつきませんでしたが、とにかく、これを書いた人が困っているということはわかりました。手紙をどうしようか考えていると、牧師が郵便局に入ってきました。郵便局長はその手紙を牧師にわたして、「こういう手紙があるのですが、どうしたらいいですか?」とたずねました。

牧師は封筒を開け、手紙を読みました。もちろん、だれが書いたのかは分かりませんでしたが、彼は郵便局長に「この手紙を、うちの教会に来る人たちに読んで聞かせてもよいですか?」とたずねました。郵便局長は「どうぞ、そうして下さい」と答えました。

その夜、牧師は教会の集まりで、手紙を封筒からとり出し、人々に読んで聞かせました。みんなが聞き入って、多くの人は目から涙をぬぐっています。

すると、ひとりの女性が立ち上がって言

いました。「先生、この手紙を書いた人がだれかがわかれば、わたしはよろこんでその貧しい家族を助けます。」

デイビーと母親とふたりの妹は、その夜の集会に出席していました。そしてもちろん、この優しい女の人が言ったことも聞きました。彼はすぐに立ち上がって、こう言いました。「牧師先生、おばさん!それを書いたのは、僕です!」

ふり返ると、デイビーが家族の横に立っているのが見えました。

この親切な女性は、よろこんで約束を果たしてくれました。彼女は、デイビーの家族が必要としているものをそろえてあげました。食べ物と衣服です。ほかにも多くの人たちが、援助の手を差しのべました。

その夜、家族とともに家に帰ったデイビーは、手紙を書くアイデアを思いついたいきさつを家族に話したことでしょう。家族はみんな、本当にうれしくてたまりません!わたしたちが助けを必要としているとき、イエス様はわたしたちにとって最善の助けが何かを、知っておられると思いますか?

おそらくデイビーも、学校にもどれたはずです。そして彼が大人になってから、イエス様がどれほど親切でよいお方であるかを、人々に話して聞かせたのではないでしょうか。

あることをとても必要としているとき、わたしたちはイエス様に手紙を書かなくてはいけませんか?いいえ、手紙を書く必要はありません。聖書は、イエス様からわたしたちへあてた手紙のようなものです。そしてイエス様にお祈りをすることは、手紙を書くことよりもはるかに良いことなのです。便せんや封筒や切手は必要ありません。わたしたちはいつでも、イエス様に何でもお話することができるのです。

「わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう。」ピリピ 4:19。

（終わり）

第6章
神様に真実をつくす

暗唱聖句

「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ。」
マタイ 4:10

日曜日

エペソにいる新しい信者たちが、もっていた魔術の本を燃やしたことは、多くの人の耳に入りました。その中には、イエス様のことを知り、唯一の真の神様を礼拝したいと願う人たちもいました。そしてこのことが、教会の成長をはやめることになりました。

またある人たちは、偶像を神として信じることがどれほど愚かなことであるかを考え、偶像礼拝をやめてしまいました。そのことをよく思わなかったのが、偶像をつくる人たちでした。

エペソで最も知られていた偶像は、ディアナ、またはアルテミスでした。ディアナは女神で、その偶像は天から落ちてきたものと考えられていました。その偶像をまつるために、美しい神殿が建てられました。偶像の職人たちは銀細工師と呼ばれ、ディアナ像や神殿の模型を、たくさんつくって売っていました。

ディアナを礼拝する人々は、年にいちど、女神を祝うために盛大な儀式を行いました。このお祭りに出ようと、ほかの町々からたくさんの人がエペソにつめかけました。そういう時にはもちろん、銀細工師たちのつくった偶像の模型がたくさん売れました。ところが、魔術の本が広場で燃やされてからは、ディアナと神殿の模型を買う人が、めっきり少なくなっていたのです。

そのために、銀細工師たちはひどく腹を立てていました。あまりお金がもうからな

くなっていたからです。そのうちのひとりが、なんとかしようと決心しました。彼の名はデメテリオといいます。デメテリオが何をしたかは、明日お勉強しましょう。

考えてみよう：人々が行っている儀式やお祝いの中で、クリスチャンが参加すべきでないものがありますか？

月曜日

それはおそらく、エペソで毎年行われる女神ディアナのための盛大なお祝いの時だったはずですが、いつもの年に比べると、来る人がさほど多くありません。多くの人が偶像礼拝をやめたからです。彼らは、銀細工師たちによって作られた像が、本当の神様ではないことを知ったのです。当然のことながら、銀の像が売れなくなってしまいました。お金もうけができなくなったので、銀細工師たちは怒っていました。

銀細工師のひとりであったデメテリオは、なんとかしてこの問題を解決しようと決心しました。彼は銀細工師たちを全員集めて、こう言いました。「みんなが知っているように、われわれは偶像を大量に売ってお金をもうけているわけである。」使徒 19:24,25。

それから、なぜ以前のように偶像が売れなくなったのかを話しました。それは、多くの人が偶像礼拝をやめてしまったからだと、彼は言いました。またこのままでは、ディアナとあの美しい神殿のことを、だれも気に留めなくなるかもしれないと話しました。こうなったのは、だれのせいであると、デメテリオは言いましたか？ 26,27節。

エペソのクリスチャンたちは、このディアナのお祝いを楽しんでいたと思いますか？いいえ。こういった祝いのときは、クリスチャンにとってはつらいものでした。偶像礼拝者たちはクリスチャンのことをからかい、ののしりました。エペソにある会堂で説教するのをやめた後に、パウロはツラノという人の学校で教えました。デメテリオが女神ディアナについて演説したあの日、おそらくクリスチャンたちは、ツラノの学校に集まっていました。9節。

クリスチャンに対してひどく腹を立てていた銀細工師たちは、彼らをばかにするだけでなく、もっとひどい目にあわせてやろうと企んでいました。パウロを殺したいと思っていた銀細工師たちは、彼の居場所もつきとめていました。彼らがどんな企みをしていたかについては、明日学びます。

考えてみよう：神様にしたがう選びをしていることを、だれかにからかわれたことはありませんか？

火曜日

デメテリオの話をきいた銀細工師たちは、急に興奮し始めました。デメテリオの話は人から人へ、またたく間に伝わり、ついには町中が大騒ぎになりました。群衆の数は、ますます多くなっていきました。

人々は怒り狂っています。彼らは、「ディアナよりも偉大な神はいない。ディアナの神殿よりも美しい神殿はない」と思っていましたから。そして、「大いなるエペソ人のディアナ!」と叫びました。使徒 19:28。

パウロを見つけ出そうと決心した人々は、けん命に彼をさがしましたが、見つけることはできませんでした。彼がこれまで教えていたところには、いませんでした。するとこの暴徒〔いっしょになって乱暴を働く者たち〕は、ますます怒り狂いました。彼らはパウロといっしょに旅をしていたふたりの友人を捕まえ、エペソの円形劇場へとひっぱって行きました。29 節。

ところで、パウロはどうなったのでしょう?怒り狂った群衆が彼を捕まえようとしていることをある人が知らせてくれたので、友人たちが、遠く離れた安全な場所に避難させていました。パウロが安全でいられるように、天使たちが守っていたのです。

ふたりの友人の身に起こっていることを知ったパウロは、大声で叫ぶ暴徒のところへ行って、話をしたいと思いましたが、友人たちは、彼を行かせてくれましたか? 30,31 節。

暴徒はまだ、叫んでいます。ほとんどの人は、自分たちがなぜ叫んでいるのかも分かっていません。32 節。

エペソには、多くのユダヤ人が住んでいました。パウロと新しい信者の何人かは、ユダヤ人でした。しかし、クリスチャンでないユダヤ人たちは、自分たちがパウロの味方であると、人から思われたくありませんでした。そこで彼らが何をしようとしたかについては、明日学びます。

考えてみよう: *大勢の人といっしょにいると、人間は、まわりの人たちと同じように行動してしまうことがありますか?そうすることは、いつでも正しいと言えるでしょうか?聖書にはこのことについて、何と書かれていますか?出エジプト 23:2。*

水曜日

その日エペソでは、パウロのふたりの友人が捕えられ、クリスチャンでないユダヤ人たちは、自分たちもクリスチャンの仲間だとエペソ人から思われないだろうかと恐れていました。そこでユダヤ人たちは、アレキサンデルという人に頼んで、これらの騒ぎの原因はパウロと仲間のクリスチャンたちにあると、集まっている群衆に向かって言わせました。使徒 19:33。

ところが人々は、アレキサンデルの話にはまるで興味がありませんでした。彼らはアレキサンデルをまったく相手にせず、2時間以上も「大いなるかな、エペソ人のディアナ!」と、くり

返し叫びつづけました。34節。

こんどは町の役人が話すと、人々は耳をかたむけました。この役人は、ようやく彼らを落ち着かせることができました。ディアナとその神殿が大切なのは誰でも知っていることで、それほど騒ぎたてることではない、と話したのでした。しかもパウロは、人々の拝むディアナ像や神殿を傷つけたわけはありませんから。35,36節。

考えてみよう:あなたは今までに、正当な〔道理にかなっていて正しい〕理由もなく、本当に愚かなことをしてしまったことはありませんか?何も考えずに、ほかの人たちのすることをまねるのは、はたして良いことでしょうか?「でも、みんながやっているのだから」と言うことは、もっともな理由になりますか?

木曜日

エペソの役人が、女神ディアナのことで大声をあげている大群衆に向かって話をすると、彼らは静まりかえりました。群衆によってそこに連れて来られたパウロのふたりの友人について、この役人は何と言いましたか?ふたりの伝道者は役人の話を聞いて、心から感謝したことでしょう。というのは、彼ら自身、自分たちが何も悪いことをしていないのを知っていたからです。

次に役人は、デメテリオと銀細工師たちのことを話しました。この役人の話のおかげで、人々は、なぜ銀細工師たちが群衆をそそのかしたのかがわかったはずです。本当のところ銀細工師たちは、女神ディアナや神殿のことよりも、偶像を売る自分たちの商売のことを心配していたのです。38,39節。

群衆をそそのかしてパウロを捕えさせようとした本当の理由を知られてしまったデメテリオと銀細工師たちは、きっと恥ずかしい思いをしていたでしょう。

さらに役人は、なぜこのような騒ぎを起こしたかについてローマ政府から調べられるかもしれないと、人々に警告しました。しかし、正当な〔道理にかなっていて正しい〕理由などありませんでした。パウロの友人で、円形劇場へつれてこられたふたりに、罪はありませんでした。そこにいた全員が、彼らに危害を加えようとして騒ぎを起こした責任を問われるかもしれません。

役人の言うことは正しいと、みんなが悟りました。その場から去るようにと群衆にうながすと、彼らは素直にしたがいました。騒ぎはこうしておさまりました。

考えてみよう：サタンは今でも、人々がイエス様にしたがう決心をしようとするときには、問題を引き起こそうとしますか？あなたの知り合いの中に、イエス様にしたがうことを選んだために、困難にあった人はいませんか？

円形劇場で群衆に向かって話したあの役人のことを、あなたはどう思いますか？現在でも、お金を愛することは、いろいろな問題の原因となりますか？クリスチャンでさえも、神様よりお金を愛してしまうことはありますか？パウロはテモテにあてた手紙の中で、このことについて何と言っていますか？第 1 テモテ 6:10。今週のお話をふり返り、あなたもエペソにいるクリスチャンだったと想像してみて下さい。あなたも、デメテリオが銀細工師たちに話すのを聞き、その話が人々を興奮させてパウロを傷つけさせる目的でなされていることに気づいたとします。あなたはその時、何をしたと思いますか？この時も、イエス様がサタンよりも強いお方であることが、最後にどのように示されましたか？

金曜日

パウロはその日、追って来た暴徒たちから安全に守られたことを、神様に感謝しました。イエス様は彼に、伝道の働きをつづけるようにと指示しておられました。ただしエペソからは離れて、別のところへ行って働くようにと示されていました。そこでパウロは、クリスチャン仲間たちと話をし、彼らを励ましました。おそらく、イエス様に信頼し、イエス様のために忠実に働くようにと話したのでしょう。別れを告げるパウロと抱き合う彼らの目には、涙が浮かんでいたはずです。

考えてみよう：その日、エペソの

もっと学ぼう！

★使徒行伝 19:21-41
★患難から栄光へ 28 章

大きな袋での逃亡　その1

作者不詳 エイミー・シェラード編

幼いアントアネッテは、お母さんとお父さんといっしょに、農場の中にある小さな家に住んでいました。両親は、畑でいろいろな種類の野菜を育てていました。市場が開かれる日には、育てた野菜を大きな袋に入れて、それをロバの背中の両側に乗せます。それからお父さんとお母さんは、ロバといっしょに歩いて町へ行き、市場で野菜を売るのです。かなりの距離を歩くため、幼いアントアネッテはきまって家で留守番をするのでした。

アントアネッテのお父さんとお母さんは、イエス様と聖書を愛していました。彼らの国ではクリスチャンが憎まれ、罰を受けることがあったにもかかわらず、アントアネッテの家族は何が起ころうともイエス様を愛し、彼にしたがうことを選んでいました。

アントアネッテのお父さんとお母さんは、自分たちがつねに危険な状態であることに気づいていました。もしもアントアネッテの家族がクリスチャンであることを反対者たちが知ったなら、きっと罰を受けるはずです。兵隊がやってきて、彼らを家から追い出すことでしょう。またお父さんはどこかへつれて行かれて、二度と会えなくなるかもしれません。幼いアントアネッテと彼女の両親は、イエス様が彼らを敵から安全に守って下さるように、毎日お祈りしていました。

ある日の夕方、アントアネッテは、片足でどれだけ長く立っていられるかを試そうと、小さな家のまわりをぴょんぴょんとはねていました。片足で跳ねながら、彼女は「♫うれしいな、わたしのお父さんはクリスチャン、うれしいな、わたしのお父さんはクリスチャン♫」と歌いました。

お父さんは、そんなアントアネッテを見てほほ笑みました。それから彼女を腕に抱き上げて、ひざにのせました。「あまり大きな声を出さないようにね」と、お父さんは言いました。「お母さんが、今、とっても悲しんでいるから。」

「どうしてお母さんは、悲しんでいるの?」アントアネッテは知りたがります。

「どうやら兵隊がわたしたちを見張っているらしいって、何人かの友だちが注意してくれたんだよ。兵隊はわたしたちを牢屋に入れるために、いつやってきてもおかしくないんだ」と、お父さんは言いました。「だから無事でいるためには、この家を出て、もう二度ともどって来てはいけないんだ。お母さんは、そのことを悲しんでいるんだよ。」

それからお父さんはアントアネッテに、町に行けば、このひどい国から逃げるのを手伝ってくれる友人がいることを話しました。彼らは大きな船に乗って、安全に暮らせる国へ行くのです。そこでは何の心配もせずに、イエス様を礼拝することができます。いつやって来るかわからない兵隊たちに捕まえられて、牢屋に入れられる恐れもありません。

お父さんの話を聞いて、アントアネッテは目を丸くしました。彼女は部屋を見回し、「物を持って行ってもいいの?」とたずねました。

お父さんは、何ももって行かないと答えました。家と畑をおいて出て行くことを、だれにも気づかれてはいけませんから。アントアネッテの家族が、もう二度とここへもどって来ないことを、だれにも知られてはなりません。「それで、お母さんは悲しんでいるんだよ」と、お父さんは言いました。「この家を離れなくて済んだらいいのにって、お母さんは願っている。」

アントアネッテはうなずきました。彼女も、お母さんと同じ思いでした。「いつ出発するの?」アントアネッテはたずねます。「今晩?」

お父さんは首をふり、「明日の朝、家を出よう」と、かわいいわが子に言いました。

(つづく)

第7章
別れを告げるパウロ

暗唱聖句

「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。」詩編 46:1

日曜日

エペソを去ったパウロは、ピリピの教会や、彼が始めたそのほかの教会を訪れました。それからコリントにある教会へと向かいました。

しかし、やはりもういちど、エルサレムにもどりたいと思いました。エルサレムの祭司や民の指導者たちに嫌われていることは、パウロ自身もよくわかっています。イエス様の働き人としてのパウロの影響力が大きいので、あの指導者たちは、イエス様を殺したようにパウロも殺そうとするかもしれません。彼らはパウロに、イエス様について語ることをやめさせたいのです。それでもパウロは、彼らのことを愛し、彼らのために祈っていました。

エルサレムに行けば危険な目にあうかもしれないことはわかっていましたが、パウロはどうしてもそこに行かなくてはならないと感じていました。エルサレムのあるユダヤの地には、多くの貧しいユダヤ人クリスチャンが住んでおり、パウロが始めた教会の人々、つまり異教徒からクリスチャンになった人々が、ユダヤ人のクリスチャンを助けるために、たくさんのお金をパウロにわたしていました。パウロはそのお金をエルサレムの教会に届け、教会の指導者たちから貧しいクリスチャンたちに分けてもらいたいと思いました。

異邦人のクリスチャンがこれらの貧しいクリスチャンのことを気づかっていることを、エルサレムの教会の指導者たちはきっとよろこんでくれるだろう、とパウロは思いました。お金を受け取った後には、ユダヤ人クリスチャンたちが、今までよりも異邦人クリスチャンを愛するようになることを、パウロは願っていたのです。神様はユダヤ

人を愛するのと同じように、異邦人をも愛して下さっているのですから。またパウロは、すべてのクリスチャンが兄弟姉妹のようになることを強く願っていました。

さて、いよいよエルサレムへ旅立つ時になり、パウロはいくつかの教会からいっしょに旅をする者を選びました。もちろん、ユダヤの貧しいクリスチャンのために集めたお金も持っています。

ところが、ちょうどエルサレム近くの港へ向かう船に乗りこもうとしたとき、パウロは警告を受けました。敵がパウロを殺そうとたくらんでいるというのです。

考えてみよう：パウロは怖くなって、エルサレムに行くのをやめようと決心しましたか？

月曜日

敵が自分を殺そうとたくらんでいるとの警告を受けたパウロは、ただちに旅の計画を変更しました。パウロと彼の友人たちは、マケドニヤをとおって道を引き返しました。ピリピに着いたパウロとルカはそこに何日か滞在し、ほかの友人たちは旅をつづけました。彼らはしばらくたってから、トロアスで落ち合うことにしたのです。

パウロは、しばらくの間、ルカと共にピリピに滞在できたことをうれしく思いました。彼が始めた他のいくつもの教会の中でも、ピリピのクリスチャンは最も愛すべき、忠実な者たちでした。

彼らも、ふたたびパウロに会えたことを、どれほどよろこんだことでしょう！

パウロとルカは、ピリピのクリスチャンと共に、８日の間、幸せな時を過ごしました。それから彼らは、16キロほど離れたところにある船乗り場へ歩いて行きました。そして５日後にトロアスに到着し、彼らと別れて旅をつづけたあの友人たちと会いました。彼らはトロアスに、どれくらいの期間とどまりましたか？**使徒 20:6**。

トロアスを出発する前の晩、パウロはもういちどピリピのクリスチャンに会いました。この集会は建物の３階でもたれ、明かりをとるために、たくさんのランプに火がともされました。パウロが話していたとき、ユテコという若者があいた窓にこしかけていました。しばらくすると、彼はだんだん眠くなってきました。目をこすったりして、眠ってしまわないように気をつけていたはずでしたが、いつのまにか眠ってしまいました。すると、何が起こりましたか？**7-9 節**。

考えてみよう：かわいそうに！この若者は高いところから落ちてしまいました。当然、人々はあわてて助けに向かいました。彼が死んでしまったのを見て、みんなはどれほど悲しんだことでしょう！

火曜日

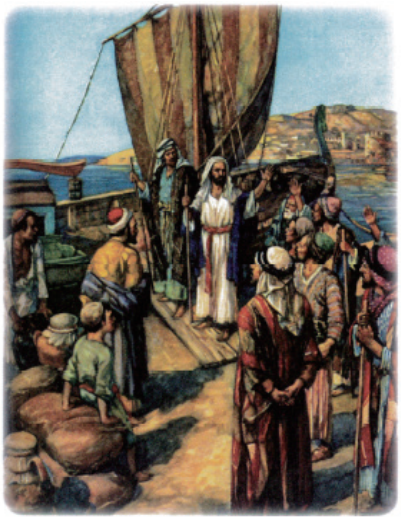
トロアスの町で、ユテコが窓から落ちたあの晩、パウロはほかの人たちにまじって階段を急いでおり、死ん

だ若者のそばにひざまずきました。それから、彼を抱きかかえて祈りました。すすり泣く人、大声で泣いている人たちの声が聞こえます。しかし、若者を抱きかかえたパウロは、イエス様が彼に命をもどしてくださることを確信したのです！パウロの言葉を聞き、人々は泣くのをやめました。使徒 20:10。

この出来事の後に、眠くなった人がいたと思いますか？まさか、そんなことはありませんね。よろこんだ人々は、聖餐式の食事が用意されている３階の部屋に向かいながら、神様をほめたたえました。11節。

まもなく夜が明け、トロアスから船が出発する時間になりました。パウロの友人たちは急いで船に乗りこみましたが、パウロは、その船が次に停泊する港まで歩くことにしました。そのほうが、船で大回りするよりも早く目的地に着くことができるからです。13節。

ひとりで旅をしている間、パウロは、イエス様の助けによって始めたあちこちの教会のことを考えていました。彼の心にあったのは、思いやりのある心配りを今もまだ必要としている多くのクリスチャンや、それぞれの教会がかかえる問題についてでした。パウロは、これらの教会に手紙を書けたことをよろこんでいました。しかし、できることならそれぞれの教会に行き、教会の人々としばらく過ごしたいと、どれほど願ったことでしょう！



考えてみよう：わたしたちの教会の指導者たちも、考えなくてはならない様々な課題をかかえていますか？しっかりした教会の指導者になるのは、簡単なことですか？わたしたちは、指導者をどのように助けることができますか？

水曜日

パウロはひとりで、歩いて次の港へと向かいました。そこでほかの者たちと落ち合い、エルサレム行きの船に乗る予定でした。使徒 20:14。

その船はエペソには寄りませんでしたが、エペソの近くを通り過ぎたとき、パウロはそこで起こった数々の出来事を思い出しました。もういちどエペソの愛する信者たちに会いたいと、彼はどれほど願ったことでしょう。けれども今回は、そうする時間はありませんでした。16節。

船は、エペソから 50 キロほどしか離れていないミレトにとまりました。思っていたよりもミレトに長くとどまることがわかったパウロは、すぐにエペソの長老たちにこのような手紙を書いて送りました。「わたしたちがここを去る前に、どうか、急いで来てほしい！」すると、エペソの長老たちがやってきました。17,18節。

パウロはエペソから来た長老たちに、たくさん伝え

ることがありました。自分はこれからエルサレムで苦難を受けると、聖霊から警告を受けたことも話しました。しかしパウロは、恐れてはいませんでした。彼はイエス様に信頼していましたし、サタンは、イエス様にしたがう彼をとめることはできませんでした。22-24 節。

考えてみよう：聖書を開いて、パウロがエペソのクリスチャンたちにあてて書いた手紙を読んで下さい。「エペソ人への手紙」というところです。第 1 章に、「イエス」「キリスト」「主イエス」「イエス・キリスト」や、「彼（イエス様のこと）」「彼の」という言葉は、何度出てきますか？10 回以上出てきますか？パウロは、心からイエス様を愛していました。パウロの手紙は、わたしたちがイエス様を知り、愛する助けとなるでしょう。

木曜日

パウロはエペソの長老たちと語り合い、いよいよ船が出航するときになると、一同はともにひざまずいて祈りました。長老たちはパウロを抱いて口づけし、別れを告げるときに大声で泣きました。もう二度と彼に会うことはないと思ったからです。使徒 20:36-38。

ミレトを去ってツロに着くまでに、パウロと友人たちは、さらに 3 つの港にとまりました。ツロにいるクリスチャンたちは、パウロがエルサレムで苦難を受けることを聖霊によって知らされていました。それで彼らは、パウロがツロを去るとき、ミレトの信者たちがしたように泣いて祈りました。またパウロを愛する人たちは、船で港を去る彼を、悲しみながら見送りました。使徒 21:3-6。

やっとのことでカイザリヤに到着したパウロと友人たちは、まずピリポの家に行きました。ピリポは、何年も前に 7 人の執事のひとりに選ばれていた者です。パウロと友人たちは、数日の間、このピリポの家で過ごしました。8 節。

ある日のこと、アガボという名の預言者がやってきて、パウロに「あなたのつけている帯を下さい」と言いました。そしてみんなが見ている前で、自分の手足をその帯で縛りました。それからこの預言者は、何と言いましたか？10,11 節。

パウロは何も恐れていませんでしたが、友人たちはそうではありませんでした。預言者が自分の手足を縛るのを見て、また彼の言葉を聞いた後で、友人たちはどうしましたか？12 節。

考えてみよう：パウロと友人たちが、旅の途中で訪れたそれぞれの場所で、聖霊が彼らに思い起こさせたことは何でしたか？聖霊はパウロと友人たちに、これからエルサレムで起ころうとしていることへの、心の備えをしてほしかったのですか？もしあなたが、これから起ころうとする悪いことを知らされたなら、どんな気持ちになるでしょうか？

金曜日

どうかエルサレムに行かないでほしいと友人たちからお願いされたパウロは、彼らをあわれに思いました。パウロは、自分が友人たちから愛されていることはよくわかっていましたが、決心は変えませんでした。彼はこれまでにも、イエス様のために苦しみを受けてきました。そして今は、エルサレムでイエス様のために捕われ人となることも、また死ぬことさえもよろこんで受け入れると言いました。使徒 21:13。

しかしパウロの友人たちは、彼の決心を変えさせようと、しきりに頼みつづけました。恐ろしいことが待ちうけているところへなど、行かせたくありません。それでも、パウロの決心はゆらぎませんでした。イエス様がパウロにして下さったことは、彼の心にずっと残っていました。ですからパウロは、イエス様のためならば、死ぬことさえもよろこんで受けるのでした。

ただパウロを悲しませていたのは、祖国の人々が今も変わらず、彼がクリスチャンになる前のような状態であったことでした。彼らはクリスチャンを嫌い、パウロがキリストについて説教するのをやめさせたくて仕方がありませんでした。何年もの間、彼らはパウロについて真実でない、ひどいことを言いつづけてきました。その結果、エルサレムのクリスチャンの指導者たちでさえも、パウロの敵が言うことを信じてしまいました。

とうとうパウロの友人たちは、エルサレムに向かおうとするパウロを引き止めるのをあきらめました。彼らは荷造りをして、カイザリヤを出る支度をととのえました。ほかの友人たちも加わり、一同は 100 キロも離れたエルサレムに向かって歩き始めたのでした。14-16 節。

考えてみよう：もしあなたがパウロだったら、ついにエルサレムの門をくぐったときに、何を思ったでしょう？

もっと学ぼう！

★使徒行伝 20 章；21:1-16
★患難から栄光へ 37 章

大きな袋での逃亡 その2

作者不詳 エイミー・シェラード編

幼いアントアネッテと両親は、生まれ故郷である自分の国から逃げようとしていました。彼らはクリスチャンだったからです。その国では、クリスチャンはひどい罰を受けるのです。ある晩、お父さんはアントアネッテに、夜が明けたら出発することを告げました。

朝が来ると、幼いアントアネッテのお母さんとお父さんは、ふだん野菜を市場に運ぶときに使う、ふたつの大きな袋を出してきました。両親がキャベツやほかの野菜を袋につめるのを、アントアネッテは見ています。彼女は、お父さんが話してくれた、知らない国に向かって大きな船で長い旅をするのが、待ち遠しくて仕方がありません。

「わたし、市場につれて行ってもらったことは、いちどもなかったわね、お父さん。」彼女はそう言いました。

「そのとおりだ。」お父さんは、にっこりほほ笑みました。「アントアネッテが歩くには、あまりにも遠いところだからね。それでいつも留守番をさせていたんだよ。」

「わたし、ロバに乗せてもらえるの?」お父さんとお母さんが、ひとつ目の大きな袋に野菜をつめ終えるのを見ながら、アントアネッテはたずねました。

「いや、ちがうよ。」お父さんは答えます。「周囲の人たちに、わたしたちがいつもどおりのことをしているように見せるんだ。みんなに、アントアネッテがいつものように、おうちで留守番をしているって思わせないとね。」それからお父さんは、この計画を、大事なわが子アントアネッテに話しました。

「いいかい、アントアネッテ。おまえは、だれにも見られてはいけないよ。わたしたちは、いつもロバの背中にぶらさげている袋のひとつにおまえを入れるからね。みんなは、その袋には野菜がつまっていて、アントアネッテはいつものように、家で留守番をしていると思うはずだから。お人形はもって行ってもいいよ。ただし、じっと動かないで、静かにしているんだよ。」

アントアネッテは、少し恐くなってしまいました。お人形をもって行けますし、お父さんとお母さんは、すぐそばについてくれます。しかし、はたしてこの大きな袋の中で、静かに動かずにいられるでしょうか?お父さんがロバに積み荷をのせる前

に、家族はひざまずいてお祈りをしました。この小さな家を離れるときに、無事に守られるよう、イエス様にお願いしました。また、何も恐れずに堂々と神様を礼拝することのできる国へ向かう道中も、ずっと守られるように祈りました。そしていよいよ出発するとき、三人はこの小さな、愛するわが家と畑とを見つめました。お母さんの目には涙が浮かんでいましたが、彼女はいさぎよく涙をぬぐってほほ笑みました。

お父さんは注意ぶかく大袋を持ち上げ、ロバの上にのせました。野菜を入れた袋を片側に、そして幼いアントアネッテが入った袋を反対側にのせました。お母さんとお父さんは、アントアネッテの入った袋のそばについて、愛するわが家を後にして歩き出しました。

大きな袋の中では、幼いアントアネッテが人形を強く抱きしめています。だれもいないところに来ると、両親は小さな声でアントアネッテに話しかけました。彼らは、アントアネッテがこんなにおりこうにしていることをほめました。道で人々とすれちがうときには、いつものようにあいさつを交わしました。何かがいつもとちがうことには、だれも気づかないはずです。

その時、お父さんがとても小さな声で何かを言いました。それを聞いて、アントアネッテの心臓はどきどきしました。

お父さんは、「兵隊がこっちに向かってやってくる」と言いました。「絶対に動くんじゃないぞ、アントアネッテ。」

（つづく）

第8章
エルサレムでの騒動

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である。」
第2コリント 6:2

日曜日

ようやくパウロと友人たちがエルサレムにたどり着くと、そこにいるクリスチャンたちは、彼らに会えたことをとてもよろこびました。その翌日、パウロと友人たちはヤコブをはじめ、教会の指導者たちに会いました。使徒 21:17,18。

このヤコブは、ヨハネの兄弟ヤコブとは別の人です。ヤコブとヨハネの兄弟はイエス様の12弟子で、ヤコブはイエス様のための殉教者〔信仰のために命をささげる者〕となった最初の人でした。今日のお話に出てくるヤコブは、イエス様の義理の兄にあたる人物でした。このヤコブは、心からイエス様にしたがう忠実な指導者でした。

パウロはこれらの指導者たちに、貧しい仲間のために異邦人のクリスチャンがささげたお金をわたしました。それから、イエス様のことを人々に教える彼の働きを、聖霊が豊かに祝福して下さっていることも話しました。指導者たちは、神様がパウロをとおしてなさっておられる働きをほめたたえました。19,20節。

ユダヤ人クリスチャンのある者たちにとって、神様がユダヤ人を愛するのと同じように異邦人をも愛しておられることを信じるのは、簡単ではありませんでした。異邦人のクリスチャンを自分の兄弟姉妹として愛し、受け入れることは、ユダヤ人のクリスチャンにとってむずかしいことのように思われました。彼らがあまりにも長い間、異邦人についてまちがった考えを持ちつづけていたために、その考えを変えることはか

なりむずかしかったのです。

ユダヤ人クリスチャンの多くは、イエス様がわたしたちのために死んでくださったときに終わらせた律法に、その時もまだしたがっていました。中には、異邦人クリスチャンもその律法にしたがうべきだと考える者たちもいました。パウロが異邦人クリスチャンに教えたのは、イエス様を愛し、十戒を守ることでした。パウロは彼らに、イエス様が死なれたときに終わらせた律法にしたがうようには、教えていませんでした。コロサイ 2:14。

考えてみよう：現在でも、まちがった考えを変えたくない人々は大勢いますか？多くの人が正しいと思っていることで、聖書に正しくないと書かれていることがありますか？もしあれば、その例をあげてみてください。

月曜日

多くのユダヤ人が、五旬節の祭りに参加しようと世界の各地からエルサレムに集まっていたとき、ちょうどパウロと友人たちもそこにいました。その中には、パウロがイエス様のことを教えた町々で、彼に反対した者たちもいました。

ある日のこと、ユダヤ人であるパウロは神殿に来ていました。そこはユダヤ人男性だけが入ることをゆるされている場所でした。パウロの反対者たちは、彼がそこにいるのを見かけました。そこへ来る前に、パウロはエルサレムで、ひとりの異邦人の友人といるところを見られていました。それで反対者たちは、パウロがその異邦人の友人をつれて、神殿の中に入ったのではないかと疑ったのです。神殿の中でも、その日パウロがいた場所は、絶対に異邦人が入ってはいけないところでした。それで、どうなりましたか？使徒 21:27-29。

もちろんパウロは、異邦人が入るのを禁止されているその場所に、異邦人をつれて来ていたわけではありませんでした。にもかかわらず、人々は何かにかり立てられたかのように怒り、パウロを神殿の外に引きずり出したのです。30 節。

群衆はパウロを殺そうとしていました。しかし、このことを耳にしたローマ軍の千卒長が、部下を引きつれ、人々があの忠実な宣教者を打ちたたいている場所へ急いでかけつけました。31,32 節。

千卒長はすぐにパウロを縛り、彼が何をしたのかを知ろうと問いただしました。群衆はパウロのことを千卒長に向かって叫びましたが、彼らの言うことはどれも食いちがっていました。千卒長が部下に、彼らの住む兵舎へパウロをつれて行くように命じると、群衆はますます狂暴になりました。兵士らは、パウロが群衆に殺され

ないように、彼を肩にかついで運ばなくてはなりませんでした。

考えてみよう：パウロの反対者たちは、彼を憎んでいました。だれかを憎むことは、十戒の「殺してはならない」という戒めを破るのと同じであるとイエス様はおっしゃいました。パウロの心にも、憎しみがあったと思いますか？

火曜日

怒りで狂暴になった群衆にパウロを殺されないようにと、兵士たちは彼を肩にかついで運びました。いよいよ兵舎の中へ入ろうとしたとき、パウロは千卒長に話しかけました。使徒 21:37。

千卒長はパウロのことを、人殺しである 4000 人の悪党どものかしら〔親分〕で、エジプト人だと思いこんでいました。しかしパウロは、自分が何者であるかを千卒長に話し、この怒っている群衆に話をさせてほしいとたのみました。38,39 節。

群衆が静まりかえると、パウロは彼らに向かって礼儀正しく、おだやかに話し始めました。彼は、自分が何も悪いことをしていないのを、みんなに知ってほしかったのです。しかしそれ以上にパウロが知ってほしかったことは、自分がなぜクリスチャンになったかということでした。また、彼らにイエス様のことを知ってもらいたいと願っていました。使徒 22:1。

パウロが話している間、群衆は静かに聞いていました。ところが、異邦人に教えるようイエス様から告げられたことを話すと、どうなりましたか？ 21-23 節。

そこで千卒長は、パウロを中に入れて、なぜこれほどまでに群衆を怒らせたのかを白状させるために、彼をむちで打つように命じました。ところが、パウロをむちで打つ前に、何が起きましたか？ 24-29 節。

翌日、パウロはサンヒドリン議会の前に引き出されました。何年も前、この議会がステパノを石打ちの刑にすると決定したとき、彼はそれに賛成しました。ところがその議会が今、パウロを殺そうとしていたのです。

考えてみよう：ステパノが殺されたあの日のことを思い出したパウロは、どんな気持ちだったと思いますか？あの日のステパノの態度は、のちにイエス様を信じるようになったパウロに、どのような影響を与えましたか？

水曜日

パウロは議会の前で話しました。そして、神様は死人を生き返らせることができると言ったら、議員たちの間

で言い争いがはじまりました。ある者たちは、パウロが正しいと言います。またほかの者たちは、彼がまちがっていると言います。まもなく彼らは、パウロの発言をめぐってはげしく争いました。パウロはこの時も、千卒長のおかげで殺されずにすんだのです。使徒 23:10。

ふたたびパウロは、兵士たちのもとで安全に過ごしていました。ただ、エルサレムに来てからのことを考えると、自分がここにきたのは本当に正しかったのか、わからなくなってしまいました。また、真の神を礼拝していると言いながら、神の子であられるイエス様を信じない人たちのことを思うと、パウロは悲しくなってしまいました。また、異邦人である兵士たちの前で群衆と議会のとった、恥ずべき見苦しい行動のことを考えました。その時イエス様は、ご自身がパウロと共におられることを、彼にどのように気づかせましたか？ 11 節。

あの怒り狂った群衆は、今でもパウロを殺したいと考えています。40 人以上の者が、パウロを殺すまでは何も飲み食いしないと誓いを立てたほどです。彼らは千卒長に働きかけてパウロを議会につれてこさせ、パウロが通りかかったら、隠れたところから飛びかかって殺そうと企んでいました。議員たちは、よろこんでこの計画の手助けをしたと思いますか？ 12-15 節。

考えてみよう：パウロは、自分を殺そうとするこの恐ろしい計画のことを知っていましたか？イエス様はどのようにして、パウロを安全に守ることができたのでしょう？そのことは明日、お勉強しましょう。

木曜日

40 人以上もの男たちが、パウロの命をねらっています。しかし、彼らの計画に気づいた者がいました。それはだれでしたか？その人は何をしましたか？ 使徒 23:16。

パウロの甥は、ただちにローマの千卒長にそのことを話しました。その話をきいた人は、ほかにだれもいませんでした。17-21 節。

千卒長は、この若くて勇敢なパウロの甥に、「わたしに話したことは、だれにも話してはいけない」と言いました。22 節。

ローマ市民であるパウロに危害が加えられてはいけないことを、千卒長は心得ていました。ところが、エルサレムではパウロの安全を守れないことに気づきました。そこで、千卒長はどのような命令を下しましたか？ 23,24 節。

千卒長は、パウロのために手紙も書きました。その手紙を係の役人にあずけて、総督ペリクスにわたすようにと言いつけました。

25-30節を読んでみましょう。

歩兵400人、騎兵70人がパウロをつれてエルサレムを出たのは、夜の9時でした。馬が石畳の歩道を、パッカパッカ歩いていく音は、騒々しかったにちがいありません。ところが、だれもそのことを気にとめなかったようです。パウロの敵ですら、パウロが馬に乗せられて、兵隊に守られながら町を出たことに気づきませんでした。ふつうの歩兵200人に加え、槍をもった200人の兵隊、さらに70人の騎兵がパウロを保護していました。

考えてみよう：パウロを殺すまでは飲み食いをしないと誓った男たちにとっては、まったく予想もしないことが起こったのです！あの日イエス様は、パウロを守るために、どれだけの人を動かされましたか？

金曜日

パウロはもう、イエス様に出会ったころのような、若い青年ではありませんでした。それでもずっと旅をしていたので、歩くのは平気でしたが、馬に乗るのは慣れていませんでした。カイザリヤに到着するまでに、パウロの体は痛み、疲れきっていたことでしょう。使徒23:32,33。

千卒長からの手紙を読んだ総督のペリクスは、パウロを訴えていたエルサレムの指導者たちを呼び寄せました。ユダヤ人たちが来るのを待つ間、ペリクスはパウロを、安全で居心地のよい場所で過ごさせました。35節。

5日たって、パウロを訴えている一団がやってきました。その中には、大祭司と弁護人のテルトロもいました。まもなく、エルサレムから来たユダヤ人らとパウロは、ペリクスの前に立っていました。使徒24:1。

はじめに、テルトロがペリクスにむかって、パウロについてのでたらめな証言をしました。テルトロとそのほかの者たちは、テルトロの言うことが正しいと主張しました。

テルトロの証言が終わり、こんどはパウロが証言する番になりました。10節。

パウロの話を聞くうちに、テルトロの主張するような悪いことを、パウロが一切していないことがペリクスにはわかりました。けれどもペリクスは、彼を釈放しませんでした。釈放はしないで、エルサレムで怒り狂った群衆からパウロを救い出した、あの千卒長と話がしたいと言いました。22節。

ですからパウロは、まだ囚人という立場でした。しかしペリクスは番人に命じて、パウロを鎖でつながず、彼がいつでも友人たちと会うのを許可しました。23節。

考えてみよう：10-12節に書かれている、ペリクスの前で行ったパウロの演説を読んでみましょう。パウロの話を聞いて、ペリクスはどう感じたと思いますか？

もっと学ぼう！

★ 使徒21:16-40;22,23章；24:1-23;

★ 患難から栄光へ38,39章 p. 105-110;

大きな袋での逃亡　その3

作者不詳 エイミー・シェラード編

幼いアントアネッテと両親は、クリスチャンを嫌う国から逃げ出そうとしていました。この幼い少女は、ロバの運ぶ大きな袋の中に隠れていましたが、馬に乗った兵士らがこちらに向かって近づいてきます。

兵士らが近づいてくる間、お母さんとお父さんは声をひそめて祈っていました。

そばの大きな袋の中では、幼いアントアネッテも祈っていました。兵士らがすぐそばで馬を止めたとき、彼女は大声で泣き出したいほどでした。しかしイエス様が、アントアネッテがねずみのようにじっとして、静かにしていられるように助けてくださいました。

「袋の中身は何だ?」兵隊のひとりがきつい口調で言います。

お父さんは、「キャベツと、他のいろいろな野菜です」と答えました。「市場で野菜を売るために、運んでいるところです。」お母さんとお父さんは、アントアネッテが隠れている袋に視線をやらないように気をつけています。

ひとりの兵士が袋のすぐ近くまで寄ってきたかと思うと、銃の後ろについている短剣を野菜の入った袋に突き刺しました。

アントアネッテと両親は、思わず息をのみました。もしこの兵隊が、反対側の袋に短剣を突き刺したら・・・?ああ、もう祈るしかありません!

兵士が、「よしいいだろう、行け」と言ったとき、彼らはどんなに感謝したことでしょう!兵士たちと馬は、ふたたび道を下っていきました。

町へ向かう道中、幼いアントアネッテと両親は、あの残酷な兵士に彼女が殺されないように守ってくださったイエス様に、心の中で何度もなんども感謝の祈りをささげました。

そしてようやく、彼らをここから逃がす手助けをしてくれる友人たちの家にたどり着きました。アントアネッテの家族が無事に到着すると、友人たちはとてもよろこび、胸をなでおろしました。

お父さんはすぐに、ロバの背中から袋をおろしました。まず、アントアネッテが入っていた袋を開け、大事な娘を出してやりました。お

母さんは泣きながら、アントアネッテをなんども抱きしめてキスをし、彼女がとても勇敢だったことをほめてあげました。そして、イエス様が敵の手から彼らを救ってくださったことを、友人たちといっしょに感謝したのでした。

アントアネッテは、疲れてお腹がペコペコでしたが、自分が静かに動かないでいられるように、イエス様が助けてくださったことをうれしく思いました。「もう大丈夫よ。」アントアネッテは、人形に向かってそう言いました。

それからまもなくして、彼らは外国へ行くために、大きな船に乗っていました。アントアネッテと両親は、大事なあの小さなわが家と畑を二度と見ることができないのを知っていましたが、そんなことはかまいません。彼らはこれから、イエス様を憎んで知ろうともしない敵におびえることなく、自由に礼拝ができる国へ行くのですから。

アントアネッテと両親は、ロバに乗せた大きな袋の中に隠れたあの日のことを、決して忘れないでしょう。そしてあの日、道で会った敵の兵隊から、イエス様が安全に守ってくださったことも、決して忘れることはないでしょう。

（終わり）

第9章
失われた機会

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「彼がわたしを呼ぶとき、わたしは彼に答える。わたしは彼の悩みのときに、共にいて、彼を救い、彼に光栄を与えよう。」詩編 91:15

日曜日

ペリクスは、パウロをエルサレムに送り返しませんでした。エルサレムにいる反対者たちが、彼の命をねらっているのを知っていたからです。それでペリクスは、パウロをカイザリヤにとどめていました。

ある日のこと、ペリクスと妻のドルシラは、パウロにイエス様のことをもっと話してくれるように頼みました。使徒 24:24。

パウロは、このふたりの心に聖霊が語りかけておられると確信しました。彼はよろこんで、人類の身代わりとなって死ぬためにおいでになった、神様のみ子について語りました。また、人が心から十戒にしたがうことを選ぶときに、助けて下さる聖霊についても話しました。

さらにパウロは、人間の一つひとつの選びをイエス様がご存じであることを話しました。イエス様は、わたしたちの言うことや行いだけでなく、心で思っていることまで知っておられることについてです。彼らの身の上に起こることは、彼ら自身の選びにかかっていると、パウロは警告しました。

これを聞いたペリクスは、これまで味わったことのない恐怖におそわれました。これまで犯してきた数々の悪事が、頭の中をかけめぐっていました。ペリクスは、自分が変わるべきであることに気づきました。ところが彼は、ただちにこれらの思いをしりぞけてしまいました。なんと悲しい選びをしてしまったのでしょう！ペリクスはパウロに、何と言いましたか？25 節。

ペリクスはふたたびパウロと話し、興味を持っているかのようなふりさえしました。しかし、その本当の目的は何でしたか？26 節。

考えてみよう：パウロは自由の身となるために、ペリクス

にお金をわたすように誘惑されたのでしょうか？もしそうしていたら、自分がまちがっていたと認めたことになるのではないでしょうか？

月曜日

ペリクスは、イエス様と聖霊に対して「いいえ」と言ったのです。それはとても悲しいことです！そのわずか２年後、フェストがペリクスに代わって新しい総督に就任しました。あのユダヤ人たちは、パウロのことを忘れていたでしょうか？まさか、そんなはずはありません！フェストがエルサレムに行くと、どうなりましたか？使徒 25:1-3。

祭司と民の指導者たちは、今もなお、パウロを殺そうとたくらんでいました。しかしフェストは、パウロをエルサレムに送り返しませんでした。代わりに、祭司と民の指導者たちがカイザリヤにやってきました。フェストがパウロを彼らの前に引き出すと、これらの怒った指導者たちは、またしてもパウロについてでたらめな証言をしました。4-8 節。

フェストは人々をよろこばせるため、パウロに何を提案しましたか？パウロはそれに、何と答えましたか？9-11 節。

フェストは、皇帝ネロにパウロの裁判をしてもらうため、彼をローマに送らなくてはいけなくなりました。しかしその前に、身分の高い人たちに、パウロがイエス様のことを伝えるチャンスがおとずれました。その人たちとは、アグリッパ王とその姉妹

ベルニケ、そしてもちろん、フェスト自身もそのひとりです。13,23 節。

パウロは、いつでも喜んでイエス様のことを話しました。彼は、これらの偉い人たちの前に鎖をかけられて立たされても、まったく恐れず、恥じることもありませんでした。パウロは、自分がどのようにしてイエス様の忠実な働き人となったかについて語りました。すると、フェストが話をさえぎりました。使徒 26:24,25。

神様はどの時代においても、ご自分の民のために預言者をおつかわしになったことを、アグリッパ王は知っていました。また、これらの預言者の言葉が真理であることもわかっていました。さらに王は、パウロが真理を語っていることにも気づいていました。はたして彼は、イエス様を受け入れる勇気をもち合わせていたでしょうか？

考えてみよう：聖霊がアグリッパ王に語りかけておられるのが、パウロにはわかりました。聖霊がわたしたちに語り、わたしたちがいろいろな選びをするのを、天使たちはどんな気持ちで見ていると思いますか？

火曜日

アグリッパ王に語っている間、パウロは心の中で祈っていたことでしょう。パウロは王に、どのような質問を

しましたか？王は何と答えましたか？使徒 26:27,28。

パウロは、鎖をかけられた自分の手を差し出し、やさしいまなざしでフェストとアグリッパ王、ベルニケ、話を聞いていたそのほかの人たちを見つめました。この人たち全員がイエス様を選んでくれるようにと、パウロはどれほど強く願ったことでしょう！彼は、自分の心にあるのと同じ平安と幸福を、みんなに味わってほしかったのです。そして、彼らが皆、いつの日か天国に行けるようにと願いました。神様は彼らに、イエス様を救い主として受け入れるという、すばらしい選びの機会を下さっていました。それにもかかわらず、彼らはイエス様を選ばなかったのです。それは本当に、残念なことです！30-32 節。

これらの身分の高い人たちは、自分たちがサタンに捕えられていることに気づいていませんでした。そこにいた人たちの中で、本当の意味で自由だったのは、パウロひとりだけでした。イエス様が彼を自由にしてくださったからです。パウロは、そこにいた偉い人たちも、イエス様によって自由にされることを心から望んでいました。彼はすでに、ローマ皇帝から裁判をうけたいとの意志をあらわしていました。そこで、ローマの役人ユリアスは、パウロやほかの囚人たちをひきつれて、船でローマに向かいました。使徒 27:1。

当時の船旅は、決して楽ではありませんでした。そのころの船には、現在の船とはちがって、エンジンがついていませんでした。そのため、大きな帆をはらなくてはなりませんでした。もちろん、天気を知らせるラジオもありませんでした。船乗りたちは、方向を示す星に頼らなくてはなりませんでした。空が雲におおわれる夜は、星が見えなくなりました。

パウロは、ふたりの友人が同行してくれたことに感謝しました。そのひとりは医者のルカで、もうひとりはパウロが始めた教会から来た者でした。しかしこの時、それがひじょうに危険な旅になるなど、思いもしませんでした。

考えてみよう：今日の物語に出て来た人たちの中で、聖霊に「いいえ」と言ったのはだれでしたか？

水曜日

パウロとほかの囚人たちは、船に乗ってローマに向かっていました。ローマの役人ユリアスは百卒長で、百卒長というのは、100 人の兵隊を指揮する人のことです。

一行は、どこかの港で船を乗りかえなくてはなりませんでした。「良き港」と呼ばれる港に着いたころには、もう冬が来ており、船で旅をするにはあまりにも危険でした。そこでパウロは、冬の間は「良き港」にとどまるべきだと言いました。ところが、百卒長とほとんどの乗組員がもっと先に

進みたいと言ったので、航海をつづけることにしました。始めのうちは順調でした。ところがまもなくして、強い風が船に吹きつけ、制御できないほどになってしまいます。9-15節。

船には、一そうの救命ボートしか備えつけられておらず、乗組員たちはどうにか、このボートを安全な場所へ引き上げることができました。それから、ロープを船の周囲にまわして、船がバラバラにならないようにしめつけました。嵐がますますはげしくなると、彼らは船を軽くするために、重い荷物を海へ投げ捨てました。それでも、ますます危険な状態になるばかりでした。16-19節。

2週間もの間、船ははげしい風によって、荒々しい波に次から次へと打ちつけられました。全員、おぼれ死んでしまうかと思われました。ところが、パウロはみんなに何と言いましたか？ 20-25節。

船はどこかの島に打ち上げられるだろうと、パウロは警告しました。するとその晩、パウロの言ったとおり、船が陸に近づいていることが分かりました。26-29節。

船乗りたちは、ひそかに船をぬけ出す計画を立てました。彼らは錨をおろすふりをして、実際には救命ボートに乗りこみ、陸へ逃れようとしていたのでした。もし船乗りたちがその計画を実行したら、どうなるとパウロは言いましたか？ 30,31節。

考えてみよう：サタンは船を沈めたかったと思いますか？それはなぜですか？パウロはそれでも、イエス様に信頼していましたか？

木曜日

この時になって船長と百卒長は、パウロの言うとおりにするべきだったと悟りました。冬が終わるまで、彼らは「良き港」にとどまるべきだったのです。船乗りたちは今、たったひとつしかない救命ボートで船から脱出しようとしています。ところが、ボートをつなぎとめていたロープを兵士らが切ったため、救命ボートは海に落ちてしまいました。使徒27:32。

パウロは、船に乗っている者たちみんなに、何かを食べるよう強くすすめました。大きな不安をかかえ、死に物狂いで働きつづけてきたので、食べることも飲むこともすっかり頭になかったのです。パウロは彼らに、だれひとりとして命を失う者はいないと約束しました。33-36節。

パウロの言ったとおり、船は動かなくなりましたか？ 37-41節。

兵士らは、囚人たちが逃げ出さないよう、彼らを殺さなくてはならないと思いました。しかし百卒長は、それを止めました。百卒長は、パウロの命を救いたかったのです。「泳げる者は泳いで」と、パウロは言いました。「泳げない者は、何か浮いているものにつかまって…」42-44節。

こうしてついに、全員が助かりました。彼らは、どれほど感謝したことでしょう！流れ着いたところは、マルタ島でした。その島の人々は異教徒でしたが、とても親切でした。

その日はとても寒く、雨も降っていたので、親切な島の人々はすぐに火をたいて、ぬれてこごえている者たちの体をかわかし、温めてくれました。使徒 28:1,2。

パウロは、火にくべるための枝を集めていましたが、その枝の間に、強い毒をもったヘビがいました。枝を火に入れると、何が起こりましたか？ 3 節。

考えてみよう：自分はかならずローマにたどり着くとのイエス様のお約束を、パウロは覚えていましたか？イエス様は、そのお約束をはたして下さいましたか？

金曜日

マルタ島で、火の周りにいた異教の人たちは、猛毒をもったヘビがパウロにかみついたことに気づきました。彼の手にヘビがぶらさがっているのを見たからです。こうなったのは、パウロが悪人だからにちがいないし、彼はすぐに死ぬだろうと、島の人たちは思いました。

パウロが手でふりはらうと、ヘビは火の中に落ちました。島の人たちは、その様子をうかがっていました。彼らは、このヘビの毒がひじょうに強いことを知っています。ところが、パウロの身に何も起こらないのを見て、島の人たちはどう思いましたか？ 5,6 節。

おそらくこの出来事のニュースは、またたくまに広まったことでしょう。そして、イエス様はパウロをとおして、マルタ島の人々を助けてくださいました。島のある偉い人の父親が重い病気にかかったとき、パウロは彼に手をおき、イエス様のみ名によって祈りをささげました。するとその病人は、いやされたのです。それから長くたたないうちに、パウロは多くの人々を、イエス様のみ名によっていやしてあげました。8,9 節。

マルタ島で３か月間過ごしたあと、パウロとほかの者たちは、この島にとまっていた別の船に乗りこみました。マルタ島の親切な人々は、パウロたちが出航する前、彼らがローマに着くまでの旅に必要な物を恵んでくれました。10,11 節。

考えてみよう：このころ、パウロはかなり年をとっていました。長年の間、彼はイエス様のためにずっと働いてきました。そして今、無実の罪で囚人となり、ローマ兵に鎖でつながれています。ローマにおいて、イエス様がパウロをどのように用いようとしておられたかは、パウロ自身もはっきりは分からなかったことでしょう。

もっと学ぼう！

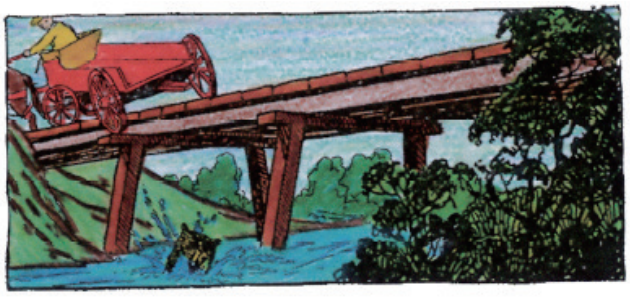
★使徒行伝 24:24-27;25-27 章；28:1-11;

★患難から栄光へ 39 章 p. 108-42 章

チャーリーと橋　その1

作者不詳 エイミー・シェラード編

ずっと昔、麦や大麦、ライ麦などの穀物を栽培する農夫たちは、粉を買うためにお店に行くことはありませんでした。彼らは自分の育てた穀物を水車小屋へもって行き、粉ひき屋がそれを粉にしました。そして農夫たちはその粉を持ち帰り、妻たちがその粉でパンやクッキー、ケーキやマフィンなどを焼きました。



今週のお話は、ロードアイランド州で起こった出来事です。お話に出てくる人物や馬の名前を知りませんので、ここでは農夫のお父さんをジョーンズ、そしてその息子をジョージ、馬をチャーリーと呼ぶことにしましょう。

チャーリーはおだやかで従順な〔おとなしくて言うことをよく聞く〕、年老いた馬でした。農夫のジョーンズは、息子のジョージに馬車のあやつりかたを教えていましたから、チャーリーを馬車につないでも、まったく心配しませんでした。ジョージにおつかいを頼んでも、馬のチャーリーがジョージを困らせることはないとわかっていました。

ある日、農夫のジョーンズの妻は、ライ麦の粉が必要になりました。そこでジョーンズは、年老いた馬のチャーリーを馬車につなぎ、ジョージを呼びました。「このライ麦を水車小屋にもって行って、ひいてきてくれ。」ジョーンズは、ライ麦の大袋を馬車に乗せながら、まだ年若い息子にそう言いました。

ジョージはいつでも、父親のためによろこんで馬車をあやつりました。彼はまもなく運転席にすわり、水車小屋に向けてでこぼこ道を走るチャーリーの手綱をとっていました。馬車を動かすのをすべて任されると、なんだか大人になったような気分です。

水車小屋へ行く途中には橋があって、前方に目をやると、まもなくその橋にさしかかるところでした。橋には手すりがありませんでしたが、ジョージはまったく心配しませんでした。チャーリーは年老いていましたが、この橋を何度も通ったことがあるのを知っていたからです。

橋にさしかかると、チャーリーはいつもどおりに歩きました。ところが橋の真ん中にくると、チャーリーが立ち止まってしまいました。なぜ立ち止まったのか、

ジョージにはわかりませんでした。

「行くぞ、チャーリー!」ジョージは、手綱をチャーリーの背中にぴしゃりと当てて言いました。チャーリーはこれまで、いつも従順でした。ところがこの日は、まるで言うことを聞きません。それどころか、チャーリーは後ずさりを始めたのです。

ジョージは、どうにかして後ろに下がってくる年老いたチャーリーを止め、前へ進ませようとしますが、それでもチャーリーは言うことを聞きません。もうジョージは、すっかり怖くなってしまいました。大人になったような気分は、たちまち消え失せてしまいました。こんな時、父親がここにいて、どうすればよいかを教えてくれたら、と思いました。いつも従順だったチャーリーがどうして?このままチャーリーが後ろへ下がりつづけて、馬車が橋からはみ出して水の中へ落ちてしまったらどうしよう?

「イエス様、お願いです。今すぐに、僕を助けてください!怖くてたまりません!」ジョージは声をあげて言いました。

ところが老いぼれチャーリーは、さらに一歩、いや二歩下がりました。するととつぜん、馬車の後輪のひとつが、橋からはみ出しました。ライ麦の袋が馬車からすべり落ち、下の川で水しぶきをあげるのをジョージは聞きました。そしてまさにちょうどその時、老いぼれチャーリーは後ろに下がるのをやめ、そこで完全に立ち止まったのです。

(つづく)

第10章
帰って来た奴隷

暗唱聖句

「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。」マタイ 6:14

日曜日

パウロを乗せた船は、ついにイタリアに到着しました。本当に、長い長い旅でした！ただし、彼らが到着したところからローマまでは、まだ220キロ以上もあります。その上、パウロは兵士のひとりに鎖でつながれたまま、長い道のりを歩かなくてはなりません。

エルサレムへの最後の旅に出る前に、パウロはローマのクリスチャンたちにあてて手紙を書いていました。それで、彼がローマにやってくることは、すでに知られていました。ローマのクリスチャンたちは、パウロに会うのをどれほど楽しみにしていたことでしょう！

パウロも、彼らに会うことを熱望していました。ローマには、イエス様のことを学ぶ必要のある人々が大勢いることを知っていたからです。ただし、その手紙を書いたころのパウロは、囚人ではありませんでした。とらわれの状態で、いったいどうやってイエス様のことを伝えられるというのでしょう？長い危険な旅で疲れきっていたパウロは、そのことを嘆いていました。

ところがそのパウロに、うれしい知らせが届きました。パウロの着いた場所にクリスチャンが何人か住んでおり、しかも彼らは、パウロが来ることを知っていたのです。彼らはパウロに会えるのを、心をおどらせて待っていたはずです！まさか鎖につながれた囚人として来るなど、考えてもみませんでしたが、そのことによって、彼らはこれまでよりもパウロをいとしく思いました。そして、自分たちのところに何日か泊まってほしいと願い出ました。

心の優しい百卒長ユリアスは、パウロ

のことが好きでした。それでユリアスは、パウロに新しいクリスチャンの友人たちと過ごす時間を与えるために、1週間、その町に兵士たちと囚人たちを滞在させたのでした。使徒28:13,14。

考えてみよう：パウロは、イエス様のために囚人となったことを、恥じていたと思いますか？わたしたちはどこにいようとも、また何が起ころうとも、イエス様の伝道者でいることができますか？

月曜日

パウロがクリスチャン仲間と交わっているあいだ、兵士たちと囚人たちは、船をおりた町で1週間も待ちました。1週間が過ぎると、彼らは気が遠くなるほど長いローマへの道を歩き始めました。

道中、人ごみの中を歩いていると、あらっぽい連中が、ほかの囚人らにまじって鎖につながれた、しらがの老人をばかにします。しかし中には、そのしらがの男がだれであるかに気づき、かけ寄ってきて「パウロさん！」と大声で呼びかける人たちもいました。彼らの多くが、目に涙をうかべていました。まるで、ずっと離ればなれになっていた父親を見つけたかのようでした。

こういった人たちがパウロと抱き合い、話しこむたびに、兵士と囚人の一団は立ち止まりました。これらの人たちは、イタリアの各地でパウロが始めた教会からやって来たクリスチャンでした。彼らはパウロがイタリアに着いたことを聞きつけ、会いにやって来たのです。パウロと再会できたことを、どんなによろこんだことでしょう！できることならローマまでの残りの道を、パウロを背負って歩きたいと思ったことでしょう。

これらの親愛なるクリスチャンと会ったことにより、パウロは勇気づけられました。彼らがクリスチャンになったのは、パウロがイエス様のことを伝えたからです。そしてパウロは、囚人となった今もなお、イエス様が共におられることを知っていました。

一同がローマに到着すると、ユリアスはすべての囚人を番兵の長に引きわたしました。フェストからの手紙もわたし、パウロについてよい報告をしました。このあと、どうなりましたか？28:16を読んでみましょう。

考えてみよう：イエス様は、パウロが鎖でつながれているあいだも、伝道者でいられるように彼を助けて下さいましたか？

火曜日

パウロは囚人であったにもかかわらず、一軒の家を借りて住むことを許されました。はじめに彼が話したかったのは、ローマにいるユダヤ人指導者たちでした。彼らは、パウロに関する悪口は聞いたことがないと言いました。しかし、クリスチャンが好かれていなかったことは知っていて、なぜそうなのかを知りたいと思っていました。使徒28:17,21,22。

パウロからイエス様の話を聞こうと、これらの指導者たちの多くがたずねてきたことを、パウロはよろこんだにちがいありません。この聖書研究は、いつまでつづきましたか？ 23 節。

指導者たちの何人かは、パウロの教えを信じましたが、中には信じない人もいました。それで、彼らのうちで大論争が起こりました。その晩、信じようとしない人たちと別れる前に、パウロは彼らに向かって、ほかに信じる人たちがあらわれるだろうと語りました。使徒 24,28,29 節。

パウロは 2 年の間、見張りの兵士とともに、借りた家に住みました。彼はその家で集会を開き、たずねて来た多くの人たちに教えました。30,31 節。

パウロの家に来た人の中に、オネシモという名の異邦人の奴隷がいました。彼は主人からお金を盗み、ローマへ逃げて来ていました。そしてパウロに会う前に、盗んだお金をすべて使ってしまっていました。彼はぼろをまとい、お腹をすかせ、おそらくおびえていたことでしょう。脱走した奴隷は、そのために殺されることもありましたから。

パウロは、オネシモのことをかわいそうに思いました。彼はオネシモに優しく語りかけ、食べ物と着る物を与えました。そしてもちろん、イエス様のことも話しました。パウロはオネシモに、イエス様が彼をゆるして変えることがおできになると話しました。オネシモは、パウロから聞いたこのすばらしいメッセージについて考え、自分も変わりたいと決心しました。クリスチャンになりたいと思ったのです。

考えてみよう：オネシモがイエス様を選ぶ決心をしたとき、パウロはどんな気持ちだったと思いますか？

水曜日

パウロは、オネシモという名の異邦人の奴隷に会いましたが、パウロからイエス様の話を聞いたあと、オネシモは変わりました。そして、クリスチャンになりました。

オネシモは、まるでパウロの息子のように、すべてのことにおいてできる限りの手伝いをしました。彼は、パウロからイエス様の話を聞くのが好きでした。オネシモは、まったく別人になっていました。もはや、初めてパウロに会ったときのような、うす汚いぼろぼろの、お腹をすかせた男ではありませんでした。

オネシモの考えかたも、変えられていました。彼は自分の犯したあやまちを、悪かったと感じていました。彼は主人からお金を盗んだことも、また主人から逃げ出したことも、悪かったと思っていました。過去に悪いことをしていたときの自分は、サタンにしたがっていたことを悟りました。しかし、イエス様に心ささげて十戒を学んだ彼は、もうこれ以上サタンにしたがい

たいとは思いませんでした。オネシモは、イエス様に従いたいと思いました。サタンにしたがっても幸福にはなれませんでしたが、イエス様にしたがうことによって幸福になれたのです。

もしかすると、パウロとオネシモは、オネシモの主人であるピレモンの家で、以前、顔を合わせていたことがあったのかもしれません。パウロはピレモンにもイエス様のことを教え、彼もクリスチャンになっていました。パウロはピレモンのことを愛していましたし、ピレモンもパウロを愛していました。

考えてみよう：その当時、奴隷が主人のもとから逃げ出すことは、大変恐ろしい行為でした。もし主人がその奴隷を見つけたら、殺すことさえできたからです。オネシモがおびえていたのも無理はありません。あなただったらどうしたと思いますか？

木曜日

逃げ出した奴隷のオネシモは、クリスチャンになりました。オネシモ自身もパウロも、彼は主人のピレモンのもとへ帰るべきだとわかっていました。オネシモはピレモンにゆるしを願い、盗んだお金を返すべきでした。これはオネシモにとって、とてもむずかしい決断だったにちがいありません。

ピレモンはクリスチャンでしたが、もしかすると、オネシモが逃げ出したことにひどく腹を立てていたかもしれません。オネシモも、今ではクリスチャンです。決して簡単な決断ではありませんでしたが、オネシモは正しいとわかっていることを実行にうつす選びをしました。はたして、ピレモンはゆるしてくれるでしょうか？オネシモをゆるすのは、ピレモンにとっても簡単なことではないでしょう。

パウロはピレモンにあてて一通の手紙を書き、オネシモはそれをたずさえ、勇気を出して主人のところへ帰りました。その手紙は、聖書にのっています。長い手紙ではないので、ぜひ読んでみてください。パウロは、手紙をどのように書き出していますか？**ピレモン 1,2 節**。

パウロはピレモンに対して「あなたはクリスチャンになったのですから、オネシモをゆるして、彼に優しくしてあげるべきです」と書くこともできたはずでした。しかし、パウロはそうしましたか？**8,9 節**。

手紙を読むピレモンの目には、おそらく涙があふれ、囚人として鎖につながれているパウロのことを思ったかもしれません。パウロの手紙には、以前のオネシモはよい奴隷ではなかったけれども、クリスチャンになってからはよい働き人になったので、きっとピレモンの役に立つだろうと書かれていました。実際にパウロは、自分の助け手として、オネシモをそばにいさせたいと願ったほどでした。**10-14 節**。

考えてみよう：もしかするとピレモンは、オネシモのことを

考えるたびに、嫌な気持ちになっていたかもしれません。そんな彼の気持ちは、パウロの手紙を読んだときに変わり始めたと思いますか？

金曜日

奴隷制度というのは、実にひどいものでした。パウロはピレモンにあてたこの手紙の中で、「すべての人間は、たとえ奴隷と主人という関係であっても、イエス様にあっては兄弟姉妹である」という神様の教えを優しく述べています。わたしたちがクリスチャンであるなら、神様がわたしたちの父親です。そしてイエス様にあって、わたしたちは兄弟姉妹なのです。ピレモン 15-17 節。

オネシモがピレモンから盗んだお金は自分が支払うと、パウロは申し出ました。ピレモンは、自分がパウロに返すべき借りがあることを思って、思わずにっこりしたかもしれません。もしパウロがいなかったら、ピレモンはクリスチャンになっていなかったはずですから。18,19 節。

ピレモンはきっと正しいと分かっていることを実行するはずだ、とパウロは言いました。手紙の最後を読み終えたピレモンの顔は、よろこびにあふれていたことでしょう。パウロは、ピレモンをたずねようと計画していました。21,22 節。

パウロのこのすばらしい手紙を読んだあとで、ピレモンがどうしたのかは分かっていません。あなただったら、どんな気持ちだったでしょう？あなただったら、何をしていたでしょう？もしかするとオネシモは、ピレモンが手紙を読むのを、静かに見守っていたかもしれません。主人は、彼をゆるしてくれるでしょうか？それとも主人はオネシモに、パウロのところへもどって手伝うようにと告げるでしょうか？このお話のつづきは、いつか天国で聞けるでしょうね。

***考えてみよう：**イエス様は今でも、人々をおゆるしになりますか？イエス様は今でも、人々を変えておられますか？もちろんです！わたしたちは日々イエス様に似た者となるために、イエス様に助けを求める必要があります。オネシモとピレモンのどちらも、イエス様を愛し、イエス様にしたがうことを学んでいました。そして、あなたもそのことを学んでいるはずです。あなたが、イエス様の助けによって変えたいことは何ですか？さあ、今いっしょに目を閉じてみましょう。そして、わたしたちが日々イエス様に似た者となれるよう、助けを求めようではありませんか。*

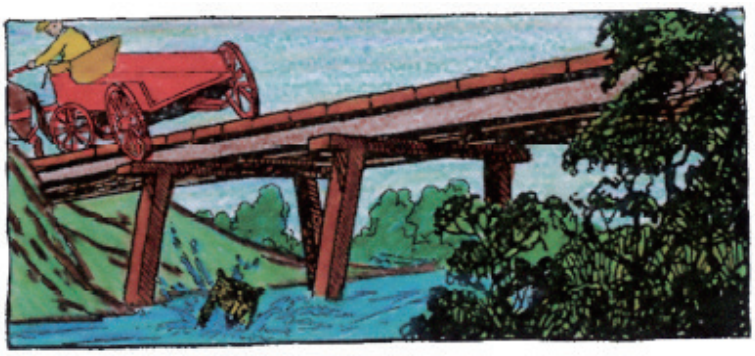
もっと学ぼう！

★使徒行伝 28:11-31；ピレモンへの手紙；
★患難から栄光へ 43 章

チャーリーと橋　その2

作者不詳 エイミー・シェラード編

馬車の後輪のひとつが橋からはみ出してしまったあと、おだやかな老いぼれ馬のチャーリーは、完全に立ち止まって動きません。おかげで、馬車全体は水に落ちなくてすみました。数名の人たちが助けにやってくるのを見て、ジョージは胸をなでおろしました。



「よし。まずは、橋からはみ出た馬車の後輪を持ち上げて、橋の上にのせよう。」男たちはそう言いました。まもなく、馬車全体が橋の上にのりました。

「あのライ麦の袋を、水車小屋に持って行くところだったんです。」ジョージは川に落ちてしまったライ麦の袋を指差しながら、助けてくれた人たちに言いました。「このおじいさん馬のチャーリーが後ずさりしたので、馬車が橋からはみ出して、袋が水の中に落ちてしまったんです。」

男たちが川の中からライ麦入りの袋をとってくるのに、さほど時間はかかりませんでした。彼らは袋を馬車にのせました。でも、中のライ麦はぬれてしまっています。ジョージはそれを粉にする前に、家へもち帰って、かわかさなくてはなりませんでした。

ジョージはこの親切な人たちに、助けてくれたお礼を言いました。彼らは、チャーリーがちゃんと言うことを聞くのかを見ていました。ジョージはまずチャーリーに橋をわたらせ、それからUターンして家に帰りました。このおだやかな年老いた馬は、いつもの従順な〔言うことをよく聞く〕馬にもどっていました。

どうも変だな！チャーリーが橋をわたり、家へもどる道を歩いている間、ジョージはそう考えていました。いつもは従順なチャーリーが、どうして急にあんなことをしたのでしょう？とにかく、こうなってしまった以上、ライ麦を粉にしてもらう前にかわかさなくてはいけません。チャーリーが言葉を話せたら、橋の上であんなことをした理由を聞けるのに、とジョージは思いました。

家に着くと、ジョージは父親に一部始終を話しました。それには父親もおどろ

きました。チャーリーを馬車からはずし、馬車を車庫におさめたあと、父親はライ麦の袋を馬車から下ろしました。かわいていたときよりも、ずっと重くなっています。

それから、ライ麦の袋を開けました。するとそこには、ぞっとするような物が入っていたのです。父親がそれをジョージに見せると、彼もぞっとしました。ふたりは顔を見合わせました。ふたりとも、なぜチャーリーが橋の真ん中で立ち止まったのかが分かったのです。馬車の後輪のひとつが橋をはみ出すまで、チャーリーが後ずさりをつづけた理由もわかりました。また、なぜライ麦の袋が川にすべり落ちたのかもわかりました。ライ麦の粒と粒の間には、細かいガラス片がたくさん混ざっていたのです。もしライ麦が水車小屋でひかれていたら、このガラスが粉に混ざり、ジョージの家族は大変危険な目にあっていたはずです。

同じ日の朝の礼拝で、天使をつかわして守ってくださいとお祈りしていました。イエス様は、その祈りに答えて下さったのです。イエス様が天使を送って、老いぼれチャーリーを後ずさりさせ、ライ麦の袋が馬車から川へすべり落ちたときに止まるよう命じたのです。さらに天使は、馬車全体を川に落とさないために、チャーリーにそこからじっと動かないように命じたのでした。イエス様は、彼らの祈りに答えて下さいました。老いぼれチャーリーは、そのあとも変わらず従順でした。

（終わり）

第11章
パウロの最後の日々

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである。」
伝道の書 12:14

日曜日

パウロは2年もの間、ローマの借りた家で、囚人として過ごしました。囚人の世話を担当していたカイザルの護衛長は、パウロができるだけこころよく生活できるよう取り計らいました。大勢の人がパウロの家をおとずれてイエス様のことを学んだので、パウロの反対者たちはそのことに腹を立てていました。

そしてついに、パウロは裁判のため、皇帝ネロの前につれて来られました。ネロは邪悪な残酷な男で、クリスチャンを憎んでいました。彼は、反対者たちがパウロを死刑にすべき理由を証明しようとするのを聞きました。それからネロは、パウロの話を聞きました。そして、パウロが無実であることがわかりました。そこでネロは、番兵に命じてパウロの鎖をはずし、解放するように言いました。この時も、神様はパウロの命を救う奇跡を起こしてくださったのです。

ふたたび自由の身となったパウロはできるだけ早く、自分が始めたあちらこちらの教会をたずねてまわりました。どんなことが起こっても、イエス様に忠実であるように信者たちを励まさなくては、と考えていました。これらの信者たちが、パウロと再会して話を聞けたことをどれだけよろこんだか、あなたは想像できますか?

パウロがこれらの教会を訪問する旅に出ていたころ、ローマで大火事がありました。火をつけたのがネロだとうわさされると、彼はそれをクリスチャンのせいにしました。そのために、何千人もの罪のないクリスチャンの男女、また幼い子供たちが殺されてしまいました。でも、パウロの命は危険にさらされませんでした。その

大火事が起こる前に、すでにローマを去っていたからです。

***考えてみよう：**ネロによって命をうばわれたクリスチャンが大勢いましたが、実際彼らは、サタンの手の届かないところにつれていかれ、守られたのでした。パウロも、自分の身に何が起ころうとも、イエス様にあって安全でいられることを知っていました。同じように、わたしたちもイエス様にあって、安全でいられることをいつも心にとめましょう。*

月曜日

自由の身となったパウロが教会をたずねてまわっている間、クリスチャンの敵どもは、彼がイエス様のことを話すのをやめさせる方法を必死にさがしていました。そしてついに、彼らは恐ろしい作り話を考え出しました。ローマの半分近くを焼け野原にしたあの恐ろしい火事は、パウロの仕業だと言ったのです。

まもなくパウロは、ふたたび逮捕されました。そしてまたしても、ローマへの船旅に出なくてはなりませんでした。何人かの友だちが、彼といっしょに船に乗りました。ほかにも同行したいと申し出る人たちは何人もいましたが、パウロが、「ついて来てはいけない」と言ったのでした。彼らに、何か悪いことが起こってほしくなかったからです。

ローマでは、何千人ものクリスチャンが殺されていました。生き延びるために、ほかの場所へ逃げていく者たちもいました。そして、生き残ったクリスチャンたちは、ひどく失望していました。

今回パウロが住む場所は、一軒の家ではなく、暗い牢獄でした。何人かの友だちは、教会を訪問するためにつかわされました。ほかの者たちは、家に帰ってしまいました。ただひとり、ルカだけがパウロと残りました。第２テモテ4:11。

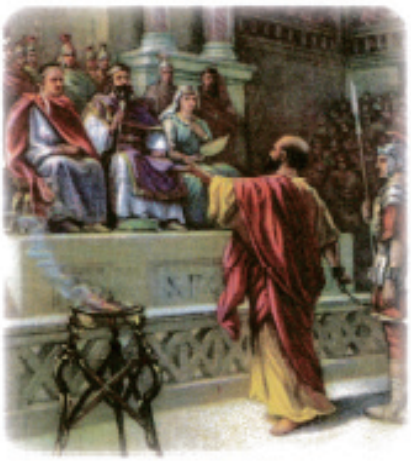
しかしもうひとり、勇敢な別の信仰ぶかいクリスチャンが、パウロの居場所をつきとめました。この勇敢な男は、パウロを慰めるためにできるかぎりのことをしました。第２テモテ 1:16,17。

その後パウロは、ふたたびネロの前につれて行かれました。前とはちがい、そこは大きな会場で大勢の見物人もいます。裕福な人や貧しい人、無知な人や賢い人もいます。そこには、高慢な人も謙遜な人もいます。その中のだれも、イエス様のことを知りません。

***考えてみよう：**ネロの前に立ったとき、パウロが考えていたのは自分のことでしたか？それとも、そこにいる人たちのことでしたか？*

火曜日

パウロはふたたび、ネロの前に立っていました。このふたりの間に見られるちがいは、すべての人の目に明らかでした。ネロの顔には、残酷さと憎しみがあらわれています。一方パウロの顔は、優しくおだやかです。何ひとつ悪いことをしていないパウロは、天使がすぐそばにいるのを知っていましたし、何も恐れていませんでした。



その場にいた人々は、パウロをひとめ見て、彼が無実であることがわかりました。うったえられている罪状とは、彼がまったく無関係であることは明らかでした。

パウロが話し始めると、人々は静まりかえりました。この日彼らが耳にしたことは、これまでに聞いたことのない言葉でした。イエス様を救い主として受け入れるなら、彼と共に永遠に生きることができると、パウロは語りました。そしていつの日か、偉大な創造主であられる神様が、一人ひとりの生きかたを記録した書物にしたがって、全人類を裁く時がやってくることも話しました。

ネロは、自分の記録の書のことを考えました。自分が過去に犯した、恐ろしい悪事を思い出したのです。その時ネロは、自分が神様の前に立たされているように感じました。それがあまりにも恐ろしかったので、彼は震えました。しかしすぐに、これらの考えをどこかへ追いやりました。パウロが話したことを、これ以上考えたくありませんでした。

ネロの邪悪な心に、聖霊が光を照らしていました。神様は彼に、悔い改めてゆるしを受けるすばらしいチャンスを与えておられたのです。ところがネロは、急いでそれをしりぞけたのでした。そしてその後、聖霊の光を受けるチャンスは、二度とやってきませんでした。なんと悲しいことでしょう!

考えてみよう:まちがったことをしてしまったと感じるとき、わたしたちがただちにするべきことは何ですか?

水曜日

この日、パウロが話すのを聞いた人々の多くが、クリスチャンになりました。この日、真理は、サタンが絶対に消し去ることのできない、まぶしい光のように輝きました。サタンがそれを消そうと必死になればなるほど、この真理の光はますます強く輝いたのです。

パウロの話を聞いたネロは、すっかり怖くなってしまったので、パウロに審判を下さずに、さびしい牢獄へ彼を入れることしかしませんでした。一方パウロは、自分がもう長くは生きられないことを知っていました。ネロは、クリスチャンの教会が成長するのを止められないので、ますます怒るばかりです。彼は自分の宮殿にも、イエス様を信じる人たちがいることを知りました。そしてとうとう、パウロを死刑に

する命令を下したのです。パウロが死ぬ前に、テモテにあてて書いた手紙を読んでください。第2テモテ 4:7,8。

わたしたちが学んだのは、イエス様のための偉大なる伝道者パウロの、ほんの一部の物語です。いつの日か、イエス様がわたしたちを天国へつれて行って下さるときには、パウロとお話しすることができるでしょう。しかし、わたしたちが怖くなったり、落ちこんだりしてしまうときには、パウロに起こった出来事を思い起こすことができます。彼は、それらの出来事のいくつかを、コリントの教会にあてた手紙に書いています。第2コリント 11:24-28。

それでもパウロは、決して不平をもらしませんでした。たとえ自分が弱くても、イエス様がいつも強くしてくださることを知っていました。それは、彼がイエス様に信頼していたからです。第2コリント 12:10。

***考えてみよう：**わたしたちも、生まれつき弱い人間ではないでしょうか？サタンは、人間に生まれつき備わっている「悪いことをしたがる性質」にしたがうように仕向け、破滅させたがっています。イエス様はパウロを助けてくださったのと同じように、わたしたちを助けることがおできになりますか？*

木曜日

パウロは死を前にして、愛するテモテに一通の手紙を書きました。パウロはテモテに、もうじきイエス様のために死ぬことを知っているものの、恐れてはいないことを伝えました。

さびしい牢獄の中で最後の時を待つ間、おそらくパウロは、ダマスコへ向かう道でイエス様にお会いした日のことを思い出していたのでしょう。あの日から、パウロの人生すべてが変わったのです。イエス様を信じる人々にしてしまった恐ろしい行為を悲しむ思いは、パウロの心から消えることはありませんでした。それでもパウロは、自分がイエス様にゆるされたことを知っていました。イエス様は彼を愛し、彼も心からイエス様を愛していました。

イエス様のための働きは、戦争で戦うことに似ています。それはイエス様とサタンとの間の戦争です。パウロは勇敢な兵士で、イエス様は彼がサタンに立ち向かうことができるように、助けてくださいました。パウロが多くの教会を立ち上げて、多くの人がこの戦いにおいてサタンに勝利し、イエス様の側につくことができるように助けることができたのも、イエス様の助けがあったからです。

パウロは、イエス様が彼のために、すばらしい報い〔ある行為の結果として受けるもの〕を用意してくださっているのを知っていました。またパウロは、だれでもイエス様の側につくことを選ぶならば、彼と同じ報いを受けると言いました。そのことについて、パウロがテモテに書いた手紙を、もういちど読んでみましょう。第2テモテ 2:7,8。

たとえ死んでも、パウロの待ち望んでい

た報いを受けるのをさまたげるものはありませんでした。わたしたちがイエス様のものとなるなら、死は眠りのようなものであり、イエス様がふたたびおいでになるときに目覚めさせられるのです。第 1 テサロニケ 4:15-17。

考えてみよう：ここでパウロが話している「報い」とは何ですか？イエス様のものとなった人はだれでも、パウロのように、サタンの手から逃れて安全でいられますか？子供たちはどうですか？

金曜日

自分の死が目前にせまっていても、パウロはまったく恐れませんでした。今日は、わたしたちが死を恐れる必要のない理由について、考えてみましょう。「死」について、イエス様がわたしたちに知ってほしいと望んでおられることを、パウロは知っていました。

これまで、わたしたちを救う神様のすばらしいご計画について、なんども話してきました。イエス様がすでに私たちのために死んでくださったのですから、私たちのだれひとりとして、永遠に滅びる必要はないのです。神様は、このことをいつも覚えてほしいと私たちに望んでおられます。

聖書を開いて、ヨハネ 3:16 のすばらしい約束を読んでください。パウロが何も恐れなかった理由は、この言葉にかくされています。

パウロは、「信じること」がどういうことなのかを理解していました。彼はイエス様を愛し、イエス様に信頼していました。パウロは、イエス様に出会うまでに自分のしてきたことが、どれほど恐ろしいことであったかに気づいていました。それは、永遠の死を受けるに値するようなことでした。けれどもパウロは、イエス様にゆるされたことを信じました。本当に自分はイエス様にゆるされたのだろうかと、彼は思い悩みませんでした。また、自分がイエス様からゆるされていることを、ぼんやりと願っていたわけでもありません。たしかに自分はイエス様からゆるされている、と信じたのです。また、死は終わりではないことも知っていました。なぜなら、イエス様がいつの日か、よみがえらせて下さるからです。

パウロは、イエス様が彼のために死んでくださったことを信じていたので、自分がどれだけ多くイエス様のために働いても、十分なお返しにはならないと思っていました。また、神様がわたしたち人間を愛するがゆえに、十戒をお与えになったことを知っていたので、彼はよろこんでそれに従いました。

パウロは、ほかの人たちもイエス様を信じる者となれるように力をつくしました。わたしたちがそうする時に、心をつくして

イエス様を愛することを学ぶのです。そして聖霊は、わたしたちがイエス様に似た者となれるように助けてくださいます。

わたしたちの世界には、悪い人たちがたくさんいますし、恐ろしい出来事もしょっちゅう起こっています。わたしたちは、こういったことを恐れる必要があるでしょうか、それとも、パウロのようにイエス様に信頼するでしょうか？イエス様がわたしたちを愛しておられ、わたしたちはイエス様のものであることを確信できますか？もちろんです。わたしたちはイエス様のお約束を信じているので、そう確信できるのです。イエス様の助けによって、わたしたちはサタンとの戦いに勝利することができます。そしてもうすぐ、戦いに勝利した何百、何千万もの人たちと、天国で会うことでしょう。さあ今すぐ、「イエス様、あなたを愛します。あなたのお約束を信じます」と言ってみませんか？

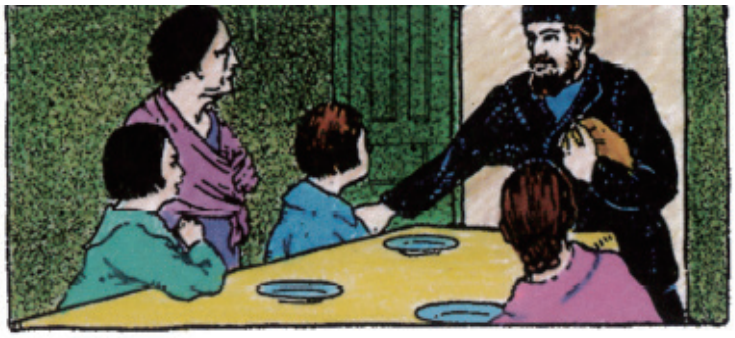
もっと学ぼう！

★第２テモテ 4:16-18
★患難から栄光へ 44-50 章

食べ物のない食卓

作者不詳 エイミー・シェラード編

ずっと昔の、ある寒い日のことです。ロシアという国で、ひとりのおばあさんが、小さな台所の戸棚の扉を開けたり、閉めたりしていました。彼女のかわいい3人の孫は、わくわくしながらその様子を見守っています。おばあさんは戸棚を見るたびに、悲しそうに頭を振りました。そしてとうとう、おばあさんは振り返り、孫である3人のかわいい女の子を見つめて、「とうとう、食べ物がなくなってしまったよ」と言いました。「食べる物は、何ひとつ残っていないの。」



女の子たちが泣き出したので、おばあさんは急いで3人を腕に抱いてなぐさめました。「泣かないで」と、おばあさんは言いました。「ここに食べる物が何もないことは、イエス様も知っておられるから、きっと用意してくださるはずよ。どちらにしてもまだ夕食の時間ではないから、もう少し遊んでいなさい。」

この幼い女の子たちはおばあさんの言うことをすっかり信じて、気がつくと、もう楽しそうに遊んでいます。おばあさんは古いロッキングチェア〔ゆれるいす〕にすわって、ここ何年かの間に、どれだけ多くのことが変わってしまったかを考えていました。

おばあさんは、ずっと貧しかったわけではありません。おばあさんとおじいさんには、たくさんのお金をもっていたころもありました。一軒のすてきな家に、何匹もの動物を飼っていました。ふたりにはすばらしい息子がいましたし、彼は愛らしい女性と結婚して、3人のかわいい女の子をもうけたのでした。

その後に、恐ろしい戦争が起こったのです。おじいさんは亡くなり、敵はおばあさんのお金も家も、土地も動物たちもうばってしまいました。息子は戦争で殺されてしまいました。息子の妻は、多くの人を死なせた悪い病気にかかり、じきに彼女も死んでしまいました。今や、息子夫婦ののこした3人の子供の面倒を見るのは、おばあさんだけでした。

最初のころは、お金をかせぐための仕事もありました。この小さな孫たちも、それを手伝っていました。時には、朝から晩まで働かなくてはなりませんでした

が、それでもまだ、食べ物を買う十分なお金はありませんでした。そのうち、仕事がなくなってしまいました。今はもう、何も食べる物がありません。しかし、おばあさんはクリスチャンでしたので、イエス様がどうにかして助けてくださると信じていました。

夕食の時間になり、おばあさんはロッキングチェアから立ち上がりました。「さあ、食卓の準備をしましょう。」彼女がそう言うと、小さな女の子たちはおばあさんの言うことにしたがい、遊ぶのをやめました。みんなでていねいに、テーブルクロスを広げました。それからお皿とコップをきちんと食卓にならべました。すべての準備がととのうと、おばあさんは、それぞれの席にすわるように言いました。

からっぽのお皿を見た女の子のひとりが、おばあさんに「夕食はまだないけれど、先にイエス様に感謝のお祈りをしない?」とたずねました。

「ええ、そうね。」おばあさんは答えました。この小さな家には、ひとかけらの食べ物すらありません。それでもおばあさんと子供たちは頭をたれ、手を組んで、イエス様に食事の感謝の祈りをささげました。

ちょうどその時、ドアが勢いよく開けられ、寒い外からひとりの男の人がはいってきました。彼は腕に何かをかかえています。「わたしが君たちに、何を持って来たと思うかね?」とたずねました。

興奮した子供たちは、いっせいに答えます。「食べ物よ!食事を持って来てくれたのね!」

おばあさんと子供たちが夕食を食べているあいだ、男はなぜ食べ物をもって来たのかを話しました。彼は、おばあさんと子供たちに食べ物が必要な気がしたので、それをもって、遠いところから歩いてきたのだと話しました。おばあさんと子供たちはそれを聞いて、彼らが祈る前に、イエス様がすでに彼をつかわしてくださっていたのだと知りました。「彼らが呼ばわる前に、わたしは答える」(イザヤ 65:24)という聖書の言葉を、おばあさんは思い出しました。イエス様は、本当にすばらしい、愛にあふれた友人なのです!

第12章
待ち望んだ日

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」ヨハネ 14:3

日曜日

人は、いつでも約束を守りますか？いいえ、そうではありませんね。人は時々、自分のした約束を守りたくないために、言い訳をすることがありますか？また時には、何かが起きたために、約束を守れなくなることがありますか？

しかし、いつでも必ず約束を守り、わたしたちを決して失望させない方がおられます。わたしたちは、いつでも約束を守るイエス様に、信頼することができます。イエス様は、わたしたちをがっかりさせるようなことはなさいません。今週は、イエス様がなさった約束のひとつについて学びます。

イエス様は天にお帰りになる前、弟子たちにあるすばらしいお約束をなさいました。そのお約束は、わたしたちのためでもあるのです。そのお約束が、今週の暗証聖句になっています。ヨハネ 14:1-3。

イエス様は、天国にお帰りになりましたか？はい。しかし、またもどって来られて、この邪悪な世界からわたしたちをつれ出し、ともに永遠に暮らすことを約束なさいました。天国で、イエス様がわたしたちのために用意してくださっているのは何でしょう？それは、わたしたちの住む家です。天国でわたしたちが住む家は、この世の王様や女王様の住む宮殿よりも、はるかに美しいのです。

またイエス様は、ご自分が天におられる間、わたしたちをひとりになさらないとも、約束して下さいました。イエス様は、力強い聖霊をとおして、今もなお、わたしたちと共にいて下さいます。16 節。

考えてみよう：イエス様がご再臨なさって、わたしたちを天国へつれて行く約束

をはたしてくださる時は、間近にせまっていますか？わたしたちがこの約束のことを知って、それについて考えるようになることを、サタンは望んでいるでしょうか？

月曜日

弟子たちは、イエス様がつねに約束を守られるお方であることを知っていました。しかし、イエス様が天に昇っていかれるのを弟子たちが見たあと、ふたりの天使が来て、彼らにその約束を思いおこさせました。使徒 1:10,11。

その日、エルサレムにもどる途中、弟子たちがよろこんでいたのはそのためでした。彼らがすべての人に、イエス様の愛とご再臨の約束についての良き知らせを熱心に伝えたのは、このことがあったからなのです。また、ご再臨のはっきりとした日時を知らなくても、その時が近いことを知る方法を、聖書は教えています。また聖書には、イエス様のご再臨のようすについても書かれています。

サタンは、もうすぐイエス様がもどってこられることを、人々に知ってほしいと思っているでしょうか？いいえ。サタンは、イエス様がおっしゃったことを人々に信じさせないように、偽りを語りました。エデンの園で、サタンがエバに何と言ったかを読んでみましょう。創世記 3:4。

しかし神様は、つねに真実だけをお語りになります。神様は何とおっしゃいましたか？創世記 2:17。

エバが、神様の言うことではなく、サタンの言うことを信じたので、わたしたちは皆、罪人になってしまいました。そして、その罪が永遠の死をもたらすことを、わたしたちは知っています。わたしたちが永遠に生きるただひとつの方法は、わたしたちの身代わりとなられたイエス様の死を受け入れ、彼にしたがう力を受けることです。

サタンがエバに、あなたは死ぬことはないでしょうと言った時から、ほとんどの人がそのうそを信じてきました。しかし聖書には、人間が死ぬと、イエス様のご再臨の時まで死んだ状態のままであると教えています。イエス様が死人に命をお与えになるまで、彼らが生き返ることはありません。

***考えてみよう：**もしかするとあなたは、すでに死んでいるはずの人が目撃されたとか、だれかが死んでいるはずの人と話したと言うのを、聞いたことがあるかもしれません。またはあなた自身が、死んでいるはずの人に似ている人を見かけたり、声を聞いたりすることがあるかもしれません。もしそのような経験があるとしたら、それはサタンか、彼の仲間である悪天使が、死んだ人の外見や行動や話しかたなどをまねて現れているということを、おぼえておくことが大切です。サタンと悪天使たちには、そのようなまねができるということを、絶対に忘れないでください。*

火曜日

人は死んだあとも本当は生きている、と考える人たちがいます。人

はふたつの部分、すなわち体と魂でできていると、彼らは信じています。いい人の魂は、死んだら天国に行くと考えます。さらに、神様は悪い人の魂を罰して、地獄と呼ばれるところにいれると考えるのです。そして、地獄にいれられた人たちは、永遠に焼かれると言います。

でも、それは真実ではありません。私たちはふたつの部分でできていて、ひとつは墓に残り、ひとつは天国か地獄へ行くとは、聖書は言っていません。イエス様が来られるとき、彼を愛する人たちは天国へ行き、邪悪な人たちは滅びると聖書は言っています。永遠に燃えつづける地獄というものはありません。神様は、最後にしかたなく悪人たちを滅ぼしますが、彼らを焼いて永遠に苦しめるわけではありません。マラキ 4:1,3。

一方、死んだらすべてが終わると考える人たちもいます。そのような人たちは、食べることも飲むことも、何であってもすべて、自分のやりたいようにするのです。「死んだらすべて終わりなのだから、生きている間はとにかく楽しめばいい」と彼らは言います。サタンはこのような人たちに、十戒にしたがっても意味がないと信じこませています。しかし、もし神様の律法にしたがわないなら、エバがしたのと同じように、わたしたちはサタンにしたがっていることになるのです。十戒にしたがうことについて、聖書は何と教えていますか？伝道の書 12:13。

すべての人は十戒に違反したために、このままでは永遠の死という報いをうけることになっています。しかしイエス様が、罪をゆるされるための道を開いてくださいました。イエス様は、わたしたちが永遠に生きることを望んでおられます。わたしたちがするべきことは、イエス様を選び、イエス様にゆるしを求め、サタンではなくイエス様にしたがうことができるように助けを求めることだけです。もしそうするならば、私たちはどうなると、聖書は教えていますか？黙示録 22:14。

考えてみよう：たしかに、サタンが十戒を憎むのも当然です！サタンは、すべての戒めをとても嫌っています。けれども、サタンが特に憎んでいる戒めがあるのを、知っていますか？そのことについては、明日からお勉強しましょう。

水曜日

いつの日か、イエス様がふたたび来られることを信じる人は多くいますが、どんなようすで来られるのかについては、さまざまな考えがあります。

中には、イエス様がだれにも気づかれないように、心の正しい人をこっそりこの世界からつれ出すだろうと信じる人たちがいます。しかし、イエス様が心の正しい人たちをこの世界からつれ出されるときには、大きな音が聞かれると、聖書は言っています。イエス様は、最初こられたとき

のように、人知れず静かに来られるわけではありません。第 1テサロニケ 4:16,17。

サタンが人々をだますのに用いる別の方法は、自分がイエス様のふりをすることです。サタンは世界のいたるところにあらわれて、奇跡さえも起こします。そしてイエス様のように話し、外見もイエス様そっくりに似せるので、ほとんどの人がサタンをイエス様だと本気で信じてしまうでしょう。第 2コリント 11:14; マタイ 24:23。

イエス様はこの世界をあとにし、天国へのぼって行かれました。ふたたび来られるときには、天からおりて来られます。ただし、地上までおりてくることはありません。そのかわりに、わたしたちが空中にあげられて、イエス様とお会いするのです。第 1テサロニケ 4;16,17。

イエス様の姿をした者が地上のあちこちにあらわれるとき、それはサタンだと知ることができます。サタンは、天からおりて来られるイエス様をまねることができません。さらに彼は、土曜日の安息日を日曜日に変えたというでしょう。

これまで、イエス様を愛した幾千、幾万もの人たちが亡くなりました。聖書は、ご再臨の時にイエス様がこれらの人たちを生き返らせて、天国へつれて行ってくださると言っています。第 1テサロニケ 4:16,17。このことは、イエス様を愛して死んだ人々が、すでに天国でイエス様といっしょにいるわけではないことを示しています。

考えてみよう：サタンがイエス様の姿をしてあらわれるとき、わたしたちは、彼を見たい、または話を聞きたいという大きな誘惑にあうと思いますか？もしその誘惑に負けてしまっても、わたしたちは安全でいられるでしょうか？

木曜日

現在、さまざまな恐ろしい出来事が世界中で起きていますか？ぞっとするような事件や災害の話を見聞きすると、ときには地球全体がこわれていっているように思われませんか？

いよいよイエス様がおいでになるときが近づくと、世界で起きている恐ろしい出来事は、イエス様にしたがう者たちのせいだと言われるようになります。なぜでしょう？

イエス様にしたがう人たちが責められるのは、サタンがもっとも憎んでいる戒めにしたがうからです。それは、「安息日を覚えてこれを聖とせよ」との戒めです。

神様が安息日を日曜日に変えたのに、土曜日を守る者たちは日曜日に神様を礼拝しないので、神様が怒っておられると、人々は信じるようになるでしょう。人々は、土曜日に礼拝をする者たちを滅ぼしさえすれば、この世界は平和になると考えるようになるでしょう。そこで彼らは、すべての人は日曜日に礼拝しなくてはならないという、ひとつの「法律」をつくります。そして、その法律にしたがわない人は、死刑にすべきであるということになるので

す。

いよいよその時が来たら、わたしたちは恐れる必要があるでしょうか?いいえ。その恐るべき時がやってくるときに、神様は、わたしたちが思い出すべきある約束を下さいました。そのお約束を、ぜひおぼえましょう。詩編 91 編。

責めるでしょう。しかしそれでも、エデンの園におけるエバのように、神様の言われたことを信じようとはしないでしょう。イエス様が来られるのを見ると、彼らは何をしようとしますか?黙示録 6:15,16。

しかし、イエス様のご再臨の輝きが、彼らを滅ぼすでしょう。第 2 テサロニケ 2:8,12。

ご再臨は、イエス様を愛し、その十戒を守っている人たちにとっては、よろこびの時になるでしょう。ラッパの大きな音が鳴ると、最初の人間であるアダムの時代から、イエス様を愛し、信頼した幾千万もの人々がよみがえります。その時、彼らの姿はまったく変えられているのです!第 1 コリント 15:51-53。

考えてみよう:もし人々が聖書を勉強し、書かれていることを信じるならば、安息日の真理を知るでしょうか?人間が死ぬ時に天国に行かないことを知るでしょうか?そして、イエス様がまもなくおいでになることを信じるでしょうか?

考えてみよう:あなたは、自分がイエス様を選んだこと、また「悩みの時」にイエス様が助けて下さるというお約束を、よろこんで受け入れますか?

金曜日

マタイ 24:6,7 を読みましょう。これらの出来事は、今起きていますか?わたしたちは、毎週のように、嵐や地震、火事、飢きん、戦争などのニュースを耳にします。また、恐ろしい犯罪のことも聞きます。そして、この世の中はますます悪くなっていきます。しかし同時に、すばらしいことも起こっています。世界のいたるところで、イエス様の福音が伝えられています。これらの働きが終わったら、ふたたびおいでになるとイエス様はおっしゃいました。マタイ 24:14。

イエス様が来られる少し前に、十戒を持ったひとつの手が空にあらわれるのを、人々は見るでしょう。それは神様が、ご自身の安息日の律法を変えておられないことを示すものです。すると人々は、安息日についてまちがったことを教えた者たちを

もっと学ぼう!

★ 創世記 2:17;3:4; 詩編 91 編; 伝道 12:13; マラキ 4:1, 3; マタイ 24:6, 7, 14, 23; ヨハネ 14:1–3, 16; 使徒 1:10, 11; 1 コリ 15:51–53; 2 コリ 11:14; 1 テサ :8, 12; 4:16, 17; 黙 6:15, 16; 22:14

★各時代の大争闘 40 章

ウィリーの仕返し

作者不詳 エイミー・シェラード編

ある日の午後、家に駆け込んできたウィリー・ジャクソンの顔は、怒りで真っ赤になっていました。お母さんはウィリーを見上げて、「いったいどうしたの?」とたずねました。「どうしてそんなに怒っているの?」

ウィリーは、「ジミーが僕のビー玉をとって、返してくれないんだ」と言いました。「だから僕、絶対あいつに仕返ししてやるんだ。」

お母さんはしばらくの間だまっていましたが、静かにこう言いました。「仕返しするなんてことを、かんたんに考えないほうがいいわよ。」お母さんはつづけました。「仕返しすることは、ジミーがあなたのビー玉を盗んだことと同じぐらいまちがっているのよ。それよりは、ジミーの頭に炭火を積んだほうがずっとましじゃないかしら。」

ウィリーはもう少しで、ジミーの頭に本物の炭火を積みたい、と思うところでした。そうすれば、ジミーも懲りるでしょう。しかしウィリーは、お母さんの言ったことの意味をわかっていました。彼は、「炭火」についての聖句を箴言 25:21,22 で学んだことがありました。その聖句は、自分の敵に親切にした者たちにイエス様が報いて下さる、と教えていました。そうとはいえ、ウィリーはやっぱり仕返しがしたいのです。ジミーがしたことはまちがっていますし、ウィリーはビー玉をとり返したいのですから。彼はその日の午後ずっと、どうやって仕返しをしようかを考えていました。その日の夜、寝る時間になっても、ウィリーの頭の中は仕返しのことばかりでした。

お祈りの時間になり、お母さんがそばにひざまずいて、「主の祈りをしましょうか?」と言いました。

ウィリーはこの美しい祈りをおぼえていましたし、お母さんは彼に、それぞれの部分の意味を考えるようにと教えていました。しかし今夜は、祈りの言葉をいい始めても、そのことを考えませんでした。

「天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように。御国がきますように。みこころが天におこなわれるとおり、地にも行われますように。わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与え下さい・・・」それからウィリーは、急にお祈りをやめました。次の言葉の意味を考えたからです。お母さんは待っています。そして「つづけたくないの?」とたずねました。

ウィリーは、「つづけられない」と言い

ました。

「どうして?」お母さんはたずねます。

「だって、僕、まだジミーをゆるしてないから。ジミーをゆるさなければ、イエス様も僕が悪いことをしても、ゆるすことができない。」

お母さんは、忍耐強く待ちました。ウィリーが、何をするべきかを決心しようとしていることは、お母さんにもわかりました。やっとのことで、ウィリーは大きな息をつき、祈りの次の言葉を言いました。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるし下さい。」

お祈りの残りの部分は、楽にできました。そしてウィリーがベッドに入るころには、怒りの気持ちはすっかり消えて、彼はまもなく眠りにおちました。

次の朝、ウィリーは目を覚ますと、ジミーの「頭に炭火を積む」方法を考え始めました。ウィリーは、イエス様がなさったような方法でそれをしたいと思いました。そこで、自分がもう怒っていないことと、ビー玉は返さなくてもいいとジミーに伝えることに決めました。

お母さんはウィリーのこの計画を聞いて、にっこりしました。ウィリーが、イエス様のようにではなく、サタンのようになる選びをするように、誘惑を受けていたことを知っていました。しかし、ウィリーは正しい選びをしたので、イエス様は彼が仕返しをする代わりに、「頭に炭火を積む」練習をするように助けてくださったのです。

ウィリーの選びは、決して楽にできることではありません。だれかに嫌なことをされたら、わたしたちは仕返しをしたくなるものです。しかし、サタンにではなく、イエス様にしたがうための助けを求めることを選ぶなら、もっともっと幸福になれるはずですよ!

第13章
天国と新しい世界

暗唱聖句

「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。」

イザヤ 25:9

日曜日

ご再臨の時に、わたしたちをいっしょに天国へつれて行ってくださると、イエス様は約束なさいました。イエス様は、一瞬のうちに、わたしたちを天国につれて行くことがおできになりますか？もちろんです。けれども、わたしたちは7日間かけて天国へ行くことになっています。楽しみですね！

そのとき、いっしょに旅をする人たちのことを考えてみてください！そこにはアダムもいるでしょう。アダムは、自分と比べてわたしたちの背があまりにも低いので、びっくりするでしょうね！アダムの横にならぶと、わたしたちは子供ほどの背丈しかないように見えるはずです。でも心配はいりません。私たちの背は、天国に行ってからも伸びつづけるのです。

天国への旅には、世界中から集められた人々がくわわります。みんなが同じ言葉を話すので、お互いに自由に話すことができるようになるのです。

旅行の一団〔グループ〕の中には、イエス様や天国のことを、いちども聞いたことのない人たちがいるでしょう。おそらく、異教徒だった人たちです。異教徒であったにもかかわらず、聖霊の声に耳をかたむけた人たちです。彼らの中には、伝道者や自分の仲間たちを、危険から救ってくれた人もいるはずです。もしも彼らがイエス様のことを知っていたら、イエ

ス様のことを愛し、彼にしたがっていたはずであることを、イエス様はご存知なのです。イエス様に救われたこれらの人たちが、おどろいてよろこぶようすを、想像してみてください！おそらく彼らの保護天使が、彼らが天国へ行けるわけを話してくれるでしょう。

そのわくわくするような旅では、生まれたときからわたしたち一人ひとりにつきそって、忍耐強く見守ってくれた保護天使たちと、話をすることもできるのです。すばらしいですね！

考えてみよう：この邪悪な世界を離れることを考えるだけで、幸せな気持ちになれませんか？

月曜日

イエス様といっしょに天国への旅をする間、この地上に残されたすべての人は、死んだ状態になります。サタンと悪天使たちだけが残され、そこにはもう、彼らが誘惑したり傷つけたりするための、生きた人間がひとりもいなくなります。そしてわたしたちは永遠に、サタンと悪天使たちの手から安全に逃れることができます。

サタンと悪天使たちは、天国がすばらしいところであることを知っています。彼らも、幸福で忠実な天使だったころは、そこに住んでいたからです。しかし神様の律法に違反し、天国で問題を起こし始めたため、そこを去らなくてはなりませんでした。**黙示録 12:7-9**。

天国に着いて、わたしたちの目に入ってくるのは、美しい景色ばかりです。美しい花々や、やわらかくゆれる草におおわれた、なだらかな丘、まぶしい光をうけて輝く金色や銀色の葉をつけたいろいろな種類の木々などが、いたるところに見られます。そこでは、やわらかくおだやかな風を感じるでしょう。天国の天気はいつも晴れやかで、ちょうどよい具合です。

天国の都は、新エルサレムと呼ばれます。その大きさは、地上のどの都市よりも大きく、神様の御座がそこにあります。**黙示録 21:16,23**。

天の都は四角い形をしており、都を囲む壁の土台は、12 層の輝く石でできています。真珠でできた３つの門が城壁のそれぞれの側面にあり、通りは金でできています。それぞれの土台と門には、だれの名前がかかれていますか？それらの門と通りは、何でできていますか？ **10-21 節**。

考えてみよう：自分がこの都に住んでいるようすを、あなたは想像できますか？

火曜日

新エルサレムに入る前に、イエス様ご自身の手によって、一人ひとりの頭に冠がかぶせられます。それぞれの

冠は、きらきらと輝いています。黙示録 2:10。

それからイエス様は、一人ひとりに竪琴を下さいます。そして、みんなで歌もうたいます。イエス様に救われたよろこびを歌っている間、天使たちは私たちの賛美をきいています。天使たちは、その歌をうたうことができません。なぜなら、天使はわたしたちのような罪人になったことがないからです。これは経験の歌なので、天使たちは、イエス様によって救われたよろこびを、どう歌であらわしてよいのかが分からないのです。

それからイエス様は真珠の門を開くと、わたしたちは新エルサレムに入っていきます。そこで目にするのは、広大な『ガラスの海』と呼ばれる場所です。1枚の巨大な鏡のように輝くガラスの海の上には、一団の人々が立っていて、イエス様を賛美する特別な歌をうたいます。彼らはご再臨の前、敵対する者たちによって殺されようとした時でも、イエス様に忠実であった人たちです。

そこには、美しいエデンの園もあります。それはずっとずっと昔、世界のはじめに、イエス様がアダムとエバのために創造なさったのと、まったく同じ園です。ノアの洪水が起こる前に、イエス様はエデンの園を天国に移しておかれました。その時から、エデンの園は天国にあったのです。

エデンの園をふたたび目にしたアダムは、どんな気持ちになるのでしょう?おそらくアダムはイエス様の足元にひれ伏して、罪をゆるして下さったことと、身代わりとなって彼が死んで下さったことに感謝するでしょう。するとイエス様はほほ笑み、アダムの手をとって立ち上がらせ、互いに抱き合うことでしょう。

考えてみよう：天国という場所は、本当にあります。ただしそこでは、人々が雲の上をふわふわ浮かんで、1日中のんきに竪琴をひいているわけではありません。

水曜日

美しいエデンの園をみわたすと、そこに『善悪を知る木』がないことに気づくでしょう。イエス様がその木をとりのぞかれたからです。もうだれも罪を犯す者がいないことを、イエス様は知っておられるのです。神様の言いつけにそむき、律法にしたがわないことについて十分に学んだ私たちは、もう罪を犯したくないと思うでしょう。ナホム 1:9。

けれども命の木は、新エルサレムにあります。その木は、毎月、種類のちがうおいしい果物を実らせます。それはわたしたちのための果物です。イエス様はヨハネに、幻によってその木を見せて下さいました。その木について、黙示録 22:1,2 を読んでみましょ

う。

イエス様が約束なさった住まいは、新エルサレムにあります。あなたのためにイエス様が用意してくださった住まいを見たら、きっと胸が高鳴ることでしょう。イエス様は、あなたの好きな色やさまざまな好みを、よく知っておられます。またあなたをよろこばせる、ほんの小さなことでさえ、決してお忘れになることはありません。それぞれの住まいは、地上で最も美しい宮殿よりも、はるかに美しいものです。

そして天国に着いたら、わたしたちをもてなすために、イエス様がお祝いの食事を用意してくださることを知っていますか？イエス様ご自身が、特別な食事をわたしたちに出してくださるのです。イエス様が用意なさるおいしい食事がどのようなものなのかは、想像もつきませんね。幾千万もの人々がそこにいるので、銀の食卓はとても長いはずです。これほどすてきな時間を、わたしたちはともに過ごすことができるのです！

考えてみよう：あなたのお友だちの中には、天国を知らない人がいますか？そのお友だちもいっしょに天国へ行けるように、あなたは彼らをさそっていますか？

木曜日

天国で1000年もの年月を過ごしたあと、わたしたちはイエス様といっしょに、この世界へもどってきます。地上に近づいてくると、イエス様が悪人たちを生き返らせるので、彼らはイエス様が来られるのを見るでしょう。わたしたちはオリブ山におりますが、イエス様が山に足をつけたとたん、山はふたつにわれて、そこにはきれいで広大な場所が、何キロにもわたってあらわれます。**ゼカリヤ 14:4**。

すると天国から、新エルサレムがこの広い場所におりてきます。**黙示録 21:2**。

イエス様とともに、わたしたちが新エルサレムに入ると、サタンと悪天使たち、また悪人たちが新エルサレムの都をとり囲みます。彼らは、都を占領できると考えるのです。しかし、天から火が降ってきて、彼らを焼き尽くします。**黙示録 20:9**。

その火は、地球上のすべてのものも焼き尽くします。それは、火の池と呼ばれるものです。**黙示録 20:15**。

しかし、イエス様とともに都の中にいるわたしたちは、火から完全に守られます。それは遠い昔、世界中をおおった洪水から、ノアとその家族が箱船の中で守られたのと似ています。世界中が火におおわれて清められている間、わたしたちは都の中で安全でいられるのです。

そしてついに、サタンと悪天使たち、すべての悪人たちが、永遠に滅ぼされます。そ

れは聖書の中で「第２の死」と呼ばれています。彼らはもう二度と、よみがえることがありません。それは永遠の死であり、イエス様はその永遠の死から、わたしたちを救い出して下さったのです。黙示録21:7,8。

考えてみよう：すべての傷や汚れがきよめられる中で、ただひとつ、イエス様の手と足の傷跡だけはそのまま残ります。これらの傷跡は、わたしたち一人ひとりに対するイエス様のすばらしい、おどろくべき愛を、永遠に思い起こさせることでしょう。

金曜日

イエス様のお話を聞き、彼がわたしたちの世界をふたたび新しくなさる光景を想像してみて下さい！その時には、アダムとエバが造られたときのような、完全な肉体と完全な精神を備えた完全な人たちが、いたるところにいます。病気や悲しみや恐れはなくなり、年老いて死ぬ者はひとりもいません。

庭や畑を荒らす虫もいません。雑草やとげ、さわるとかゆくなるウルシも生えません。環境のすべてが、今とはまるでちがうのです！

あなたはその新しい地で、どのような家や庭をつくりたいですか？旅行は好きですか？空を飛んでみたいですか？いつの日か、すべての願いがかないます。あなたが会って話したい人たちのことを考えてみて下さい！アダム、ノア、モーセ、ダビデ、そのほか幾千幾万もの人たちと会うことができます。何よりもすてきなことは、イエス様とお話できることです。わたしたちは、イエス様がわたしたちを深く愛し、わたしたちのために死んで下さったことに感謝することでしょう。

天国でも安息日を守るのでしょうか？はい。安息日は、１週間のうちでも最高の日となるでしょう。わたしたちは皆、よろこびにあふれたひとつの家族として集まることになります。イザヤ 66:22,23。

考えてみよう：天国へ行くときと、新しく清められた地上にもどって来るときに、あなたがしたいと思っていることを話して下さい。だれと会って話したいですか？あなたはイエス様に、どんな質問をしたいですか？

もっと学ぼう！

★ イザヤ 25:9;66:22, 23; ナホム 1:9; ゼカリヤ 14:4; 黙示録 2:10;12:7-9;20:9, 15; 21:7, 8, 10-21, 23;22:1, 2

少女たちと黄金律

エイミー・シェラード編

読んでいた手紙をおいたお母さんの目には、涙がうかんでいました。彼女は、その手紙が運んで来た知らせを聞くのを、今か今かと待っているふたりの娘を見つめました。それは、よい知らせのはずでしたが…

「ケイシーのお母さんは、何て言っているの?」とデナはたずねます。「ケイシーは大丈夫なの?ねぇ、お母さん、なんで泣いているの?」

お母さんは、ためらいました。伝道者居住区の人たちは、5歳のケイシーをイエス様がいやして下さるようにと、一丸となってお祈りしてきました。ケイシーのかかった重い病気のために、母親はケイシーをできるだけ早く、アメリカにつれ帰らなくてはなりませんでした。

それは「ポリオ〔小児まひ〕」と呼ばれる病気でした。世界中の多くの子供たちが、小児まひのために命を落とすか、障害者になっていました。同じ居住区内では、健康だった若い医者がポリオにかかり、亡くなっていました。

お母さんはゆっくりと、「ケイシーは良くなっているわ」と言いました。「ただし」と言ってから口ごもってしまい、その後でまたつづけました。「ケイシーには、一生、障害が残るかもしれないって。彼女の片足はひどく弱っていて、重い装具をつけないといけなくなりそうなの。ケイシーはもう二度と、あなたたちや他の子供たちがするように、走ったり遊んだりはできないの。」

デナと幼い妹のシェリーは、顔を見合わせました。ひどくがっかりしているようすが、ふたりの顔にあらわれていました。ふたりは毎日、ケイシーが良くなるようにお祈りしてきました。そして、イエス様がふたりの祈りに答えてくださると、固く信じていました。

「お母さん、わたしたち、ケイシーのためにたくさんお祈りしてきたのよ。どうしてイエス様は、ケイシーを元気にしてあげないの?どうしてそれができないの?」デナはたずねました。

デナとシェリーのお母さんは、イエス様が何でもおできになることを説明しました。イエス様にとって、むずかしいことなど何もありません。そしてわたしたちは、

たとえ自分たちの身に何が起こったとしても、いつでも何が最善であるかをご存じのイエス様に信頼することが求められているのです。お母さんはふたりの娘に、イエス様を愛し信頼する人たちが、いつの日か新しい肉体を与えられて、永遠に生きることを思い出させました。

それからお母さんは、考え深げに首をふって、「ケイシーは、この居住区の子供たちの中でも活発な子だったのに」と言いました。

デナとシェリーは、うなずきました。「ケイシーは、わたしたちのだれよりも足が早かったのよ。」デナは思い出しました。「それに木登りだって、お猿さんみたいに上手だったわ。」こんどはシェリーが言いました。

「ケイシーがもどってきたとしても、とてもつらい思いをするでしょうね。歩くことさえ大変なはずだから。」お母さんはふたりに言いました。「自分ができないのに、ほかの子供たちが走ったり遊んだりしているのを見て、ケイシーはどんな気持ちになるかしら?あなたたちがもしケイシーだったら、どんな気持ちだと思う?」

その夜、デナとシェリーは、もういちどお母さんと話しました。「ねぇ、お母さん、わたしたち決めたの。」デナがとても真剣に言うと、シェリーはうなずきました。「わたしたち、ほかの子供たちが走って遊んでいるときには、絶対に、ぜったい、ぜったい、ケイシーをおいてひとりぼっちにしないわ。みんな、わざとケイシーのことを忘れることはないと思うけれど、きっとしょっちゅう忘れると思う。でも、わたしたちは忘れないようにするから。」

ふたりの幼い娘を抱きしめたお母さんの目には、ふたたび涙があふれました。でもこのときの涙は、うれし涙です。デナとシェリーは、本当にケイシーのことが大好きなので、きっとこの約束を忘れないだろうと、お母さんは思いました。そしてふたりは、本当に約束を守ったのです。

この居住区内に住んでいる子供たちのひとりが、「鬼ごっこしようよ!」「かくれんぼをしよう」とか、またはほかの楽しい遊びをしようと言うのをあなたが聞いたなら、そこできっと、勇敢にも片足を引きずりながらついていくケイシーを見かけたことでしょう。ケイシーの片側にはデナが、その反対側にはシェリーがいっしょです。この３人はいつもほがらかで、楽しそうに笑っていました。

そこにいた天使たちも、きっとほほ笑んでいたことでしょう。